
CUSTOM

山田太郎左衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CUSTOM

【Nコード】

N9248N

【作者名】

山田太郎左衛門

【あらすじ】

ふとした瞬間、異常に気づく。
次第にそれは膨らんでいく。
コインのをめくれば裏が見える。
もう一度めくったさきにあるものは、どこか違っている。

「世界は割れ響く耳鳴りのようだ」というシリーズのうち、先ず最初のお話です。頑張って完結させます。

村人編 1

私が彼と出会ったのはペットショップのショーウィンドウの前でした。

愛玩犬を見つめる瞳が印象的だったことを覚えています。

この街に引っ越したばかりの私には、ペットショップは珍しい存在でした。

もちろん、ペットショップを見たことがない訳ではありませんが、私の生まれた町には、なかったものですから、おちついて中を見て回ったことは無かったです。

様々なペットたちが一堂に会しているその様子は興味深いものがありました。

別段、ペットが欲しいと思って入ったわけではない私でも、檻の中でぐるを巻く蛇や、こちらをじっと見つめて首をかしげているインコを見ていると、物欲しくなったものです。

ひととおり見て回ったあと、店主の不平のこもる視線を背中に受けて店を出ようとしたとき、ガラスの向こうに彼を見つけました。

随分と熱心な眼差しの先にあるものを確認し、私は不思議に思います。

犬なんか、そう珍しい動物ではありません。

それに、保健所でお金もかからずに手に入るものです。

明日にも殺されるかもしれない可哀相な犬達を助けようとは考えないものでしょうか。

そんなことを考えながら店を出ました。

未だ住み慣れない部屋の中にあつては、見慣れた家具たちも、どこかよそよそしく感じられ、その中で独り食事を取っている私自身も異物であるかのように思えます。

早くも懐郷病に罹ったような気分で、買ったばかりの惣菜を箸で突

きまわした末に、バラバラになったコロツケをかき込んでお茶を啜りました。

どうも先刻から、ペットショップで見た男の眼ばかり思い出されました。

「幸薄そうな顔だったな」と彼の将来の不遇を勝手に想像しては胸を痛めたり、「もしかしたらあの後トラックに轢かれて既に死んでいるかもしれない。明日の入学式の後で献花を捧げにあの店の前に立ち寄ろう」などと死人にまで仕立て上げて彼の心配をしている自分が、なんだか可笑しくなって、私は早々に寝てしまおうと立ち上がりました。

そして気分を切り替えたつもりになって、台所で茶碗を洗っているときにも、店の前で独りぼつんと佇んでいる彼を想像しては溜息をつきます。

歯を磨いている最中も彼のことがかり考えて呆けたままだったので、歯茎を擦り過ぎてブラシが血まみれになってしまいました。

布団の中に入って、一目見ただけの彼のことを何故こんなに考えてしまうのか、もしかしたら恋にでも落ちたのではないかと年齢相応の結着を試みるも、常からの恋愛事に頓着しない性格が災いし、馬鹿馬鹿しいと一笑に付してその日は寝てしまふのでした。

入学式の後、サークル活動の勧誘をかわし学校の門をくぐると門前には数年間お世話になり続けるであろう商店街が続いていました。私の入居したアパートは、この門前町の一角にあります。

通学に費やす時間の短さと借り賃の安さは兼ね備えているものの、学生街ゆえの夜半まで続く騒音や、歴史の長さを感じさせる佇まいから、住環境までは保障されていないことは、部屋探しの際に感じていたでした。

私以外に女性が入居しているとは、とうてい思えません。

安さと近さという合理性だけを追い求める姿勢は、私が女性には珍しく理系の学部在籍している要因の一端なのかもしれません。

ですから、その日私が再びあのペットショップに立ち寄ったことも、私の供え持つ探究心の表れと解釈することも出来ます。もう一度彼に会ったとき、私の心はどういった反応を示すのか、それを客観視しようという自分と、彼に会いたいという心のままに行動を起こす感情に支配されている自分とが、相乗効果を果たして、私の足を速めました。

果たして彼はそこに居ました。

食い入るように、ガラスの向こう側の愛玩動物を見つめています。そんな彼を電信柱の影から見つめている私は、さぞや滑稽な存在なのだろうと、もうひとりの自分が囁きかけています。

それでも私は彼から目を離せないでいました。

少なくともこの時の私はこれを恋とは思っていなかったのです。

ただ、彼が気になることだけは確かなことでした。

私は彼と共に、日が落ちるまで路上の人でありました。

その日の夜、部屋の中で私は自身の感情に整理をつけようとしていました。

けれどその正体は容易には掴めませんでした。

そして、そんな夜を幾度も過ごすことになりました。

彼は毎日のように、あの場所に居ました。

それも尋常な様相ではありません。

開店と同時に現れ、閉店までの間ずっとそこにいます。

人に話しかけられても、押し黙ったまま、犬だけを見つめ続けているのです。

私はそんな彼をじっと見守っていました。

どちらも異常には違いありません。

そうして朝の10時から夜の8時まで、ずっと彼を見つめ続け、部屋に帰ればその日得た検証データを整理するのが日常と化していました。

それも10日目を迎えば、私も答えを欲するようになっていました。

このまま、この生活を続けたとしても、私は自分の気持ちを理解することなど出来ないことが、判りはじめていたのです。

私はひとつの行動を起こしました。

彼の見つめる犬を購入したのです。

私には彼がこの犬を買わない理由がわかりませんでした。

もしかしたら、目的はこの犬ではないのかもしれないと思っていました。

それを確かめたかったです。

彼とて、この行動には何らかの反応を示すであろうと考えました。

「あの犬が欲しいのですが」

私がこう言ったとき、店員は驚いたような顔をしていました。

店員も、彼がこの犬を毎日眺めていることを知っているでしょうから、この犬がいなくなったときの彼の反応がどうなるのか、気になるところだったはずです。

店員は戸惑いを隠せない様子で犬の檻に手をかけました。

彼は犬の入ったケースを眼で追っていました。レジのところにいる私が財布を取り出したあたりで、状況を判じたと見えて、あわてた様子で店の中に入ってきます。

「君、その犬は」

これが私が始めて聞いた彼の声です。

彼はそれ以上は何も言いませんでした。

今更ながらに驚いたような顔をして、黙り込みます。しばらくの間、店内を沈黙が包みました。

静寂を破ったのは店員でした。

「あの、お知り合いですか？」

店員は私と彼が知り合いと考えたようです。

私は振り返って宣言しました。

「これから知り合いになるんです」

私たちは毎日逢瀬を重ねていました。

彼と会うときは、いつも犬と一緒にでした。

その日も公園には、二人と一匹が芝に腰をおろしていました。

犬は良く人になれており、リードを離しても私たちの周りを走り回るばかりで逃げようとしませんでした。

彼はその様を見て「良く躡けられた犬だ」と呟きました。

寡黙な彼は、一日に一言か二言呟くように独白するだけでした。

そして私は何も言いませんでした。

おそらく、彼以上に寡黙だったろうと思います。

私はそのことを苦とは考えませんでした。

沈黙を苦とするのは、場を共有する相手に気を遣うからです。

彼はその必要がない人でした。

それは彼との間に信頼関係があつたからではありません。

彼が、場の空気を気に止めない人間だったからです。

そういう人間だと判っている以上、私は無理に言葉を使いませんでした。

ですから、彼から愛を告げられたときは本当に驚きました。

彼は犬と戯れながら「君が好きなんだ、僕と付き合ってくれないか」と、なんとも張りのない声で呟きました。

私ははじめその言葉が私に向けられたものとわかりませんでした。

彼があまりにもいつもと変わらぬ調子で呟くものだから、その意味を脳内で反芻するまでは判じなかったのです。

そして言葉を理解した後にも、別の解釈を試みていました。

彼が犬に対して愛を告白したのではないかと思つたのです。

なにせそのときの彼の視線は、ずっと犬を見つめていたものですから。

私の次の設問も、それに準拠するものでした。

「犬と、恋人になるの？」

「馬鹿な、君が好きなんだよ」

彼は漸く振り向いて私を見つめながら言いました。
なんとも心のこもらぬ告白ではありませんか。

彼が真実、私を愛しているとは思えませんでした。

ただ、私を見つめるその目は、ペットショップで見た、ガラスの向こうの犬を見つめる瞳と、同じものであったように私には判じられたのです。

私にはその瞳が何を意味するものか判りませんでした。

けれど彼の告白を拒否する気はありませんでした。

このときの私が、興味本位から彼の愛を受け入れたのか、それとも既に恋に落ちていたのか、今でも答えを出すことができません。

付き合ってから彼の態度は大きく変わりました。

公園や、私のアパートの前の、いつ誰が作ったともわからぬ犬小屋の前で逢瀬を交わす間、無理にでも会話を弾ませようと苦労しているように見えました。

寡黙な彼が私のために努力している様は、見ていて微笑ましくもありました。

ですから、上手く答えが返せない彼に、私が質問ばかりしていました。

「犬が好きなの？」

「ああ、犬は、好きだな」

「どういうところが好きなの？」

「その、ああ、なんだろう」

「じゃあ私は好き？」

この質問は彼を試していました。

彼が言葉に詰まるのではないかと考えていたのです。
相変わらず、私は彼の愛を信じてはいませんでした。
そんな私にとって次の彼の行動は意外でした。

彼は猛然と立ち上がり、半ば叫ぶように言いました。

「好きだよ、決まっている。なんでそんなことを今更聞くんだい？」
私は狼狽しました。

すまない、と呟く彼に、私は謝罪しました。

これは本心からのことでした。

私が彼の愛を信じたのはこの時でした。

「じゃあ、私のどんなところが好きなの？」

この質問も彼を試験するものではなく、ただこの場に流れる空気を入れ替えたいがために咄嗟にひねり出したもので、特に意味などありませんでした。

彼は暫くの沈黙の後、「似ているから」と言いました。

その言葉の直後、彼は私に別れを告げ立ち去っていきました。

私は破局したのではないかと一晩思い悩み、次の日も同じ調子で現れた彼を見るまで部屋の中を犬のごとくグルグルと回り続けることになりました。

同じ調子で現れたにもかかわらず、彼の行動には違いが生じていました。

彼はその手に花束を持っていました。

それも尋常な大きさではありません。

もしかすると、相当高価なものだったのかもしれない。

そしてその値段分の効果がありました。

私は生まれて初めて貰う花束に感銘を受けました。

花束というものには不思議な力があります。

私がロマンチックな気分になったのも、おそらくは生まれて初めてのことです。

そして私は、花束に感激する自分に、女の部分を発見し、その意外さに驚いていました。

もつと驚いたのは彼の次の行動でした。

礼を言う私の口を、彼の唇が塞いでいました。

その日、四つ目の初めてを彼から貰いました。
私は生まれて初めて恋心を自覚しました。

それから私たちは、確かに恋人らしかったろうと思います。
彼の行動は積極的になっていきました。

手を繋いだり、キスをしたり、公園以外に出かけたりもしました。
相変わらず口数は少なかったものの、彼の努力の跡が行動に表れていました。

その日の彼はいつもと違い夕刻に現れました。
手には酒を持っています。

そして私の部屋に初めてあがりました。

彼はただ黙って私に酒を勧めました。

それは私が初めて飲む酒でした。

だからなのか、一時間も経たぬうちに私は酩酊状態となりました。

彼は私をそつと抱くと、耳元で囁きます。

「なあ、いいだろう」

これだけで察しろと彼は主張していました。

私はそれを許容しました。

事が無事に済んだ後、彼はベッドに腰をかけます。

私は倦怠感から身体を横たえていました。

彼が何事か呟くのを私の耳がとらえました。

聞き取れたのはただ一言、「違う」という言葉だけでした。

その言葉を繰り返すばかりだったのです。

そして彼は服を身につけると、部屋を出て行きました。

私は引き止めましたが、彼の耳に私の言葉は届いてはいないようでした。

彼はその日から私の前に現れなくなりました。

彼が去ってからの数日は、ただ彼を待ち続けていました。

けれど、毎日訪れていた彼が、幾日経つても表れないので、私は彼との関係がこれで終わったのだと、そう判じました。

そして何日も泣き続けました。

彼の声を、唇を、掌を、腕を、思い出しては泣きました。

そして最後の言葉を反芻していました。

私とその言葉の意味を理解したのは更に数日後のことでした。

ある朝、玄関の扉を開けたとき、私は彼の気持ちを理解しました。

彼は捜していたのです。

その正体がおかしくは判りませんが、それに似ているものは、幾つかあって、それがあの犬や私であつたということ。

それが交わることで真贋を確かめられる、そんな何かであるということだけはわかりました。

何故なら、彼は私の目の前で、犬に向かって腰を振っていたのですから。

村人編2（前書き）

コインの裏です。後半エロ注意。それほどエゲつくもありませんけど。

村人編 2

その時分の僕は村の大人達が酷く遠い存在に思えることがあった。それは子どもらしい無知さの表れであつたのかもしれないが、この際絡んでいる事情が少しばかり異なると思ふようになったのは、僕が真実の一端を目の当たりにしたからなのだろう。

そのひとつが父の行動だつた。

父は毎晩のようにどこかに出かけていくのは、子供心に不審であつた。

毎夜、出かけていく父の背中を見送る母は、どこか不機嫌な様子で、僕は声を声をかけづらかつたのを覚えている。

僕は母が好きだ。そして必然、いつも威張つてばかりで、それでいて母に愛されている父を憎んでいた。これは別段、特異なことではなく、いわゆるエディプスコンプレックスのなせる業で、今の僕は父に対してなんら含むところが無い。

僕が父の悪行を暴き、それを母に報告して、父を母から引き離そうと考えたことも、心理的にはそれほど歪んだ事ではなかつたろう。

その日、友人宅に泊まると言つて夕食後に家を出た僕は、自宅近くに建てられた納屋の裏に潜んで父が出てくるのを待った。

いつもどりの時間に家を出た父の後をつけることは容易だつた。

父は夜に家を出るときには、酩酊状態であることが多かった。

僕は物陰に隠れることすらせず、街灯の無い夜道を、父から距離をとって歩いていった。この暗さならば、振り返つたとしても僕だと判じることは無いだろうと考えてのことだつた。

前には少しふらつき加減の父の影がある。

そこに新たな影が現れ、立ち止まって父と談笑し始めた。

この時になつて、僕は漸く藪の中に隠れて様子を伺つた。

藪蚊に悩まされながら父を観察していると、また影が増える。

その調子で影は数十にもなった。

僕はそこで寄り合いをすることが父の目的であつたのかと考え、近くで話を盗み聞こうと藪の中を移動していった。すると影は連れ立って移動を始める。

これだけの人数であれば、誰か一人でも僕の存在に気づくかもしれない。

尾行は慎重を要することとなった。

影の集団が入っていったのは河野の家だった。

河野家の屋敷は大きかった。

村にこれほど大きな建物は他に無い。

屋敷の中には幾人もの使用人が住み込んでいる。

そしてこの村の村長の名もまた、河野であつた。

家人は村人から「様」をつけて呼ばれている。河野家そのものを指す際には河野様というのが、この村の常識なのだ。

これらの封建的な事情には納得できうる理由も存在しているが、当時の僕はその理由というものを未だ知らぬ身だった。

僕は正当な手段で屋敷の中まで入ることが出来なかった。

その晩はこれ以上の尾行が不可能であると考え、僕は友人の家に赴いた。

河野の屋敷の裏にある山から、屋敷に進入できるのではないかということは常から考えていたことであつた。

屋敷の塀は裏手以外の三方をコの字のように囲んでいて、裏手は山のなだらかな傾斜と塀とが同化しているような造りになっている。

山からの進入は容易であるように思えた。

ただ、山は河野家の所有する土地であつたから、入ってはならないと大人たちから言い含められていて、侵入する子どもは殆どいなかった。

山に入つた子どもがいたところで、別段山には変わったところは無

かつたし、屋敷の中まで侵入すれば、使用人の誰かがそのことに気づくだろうから、この屋敷の秘密が保全され続けていることが今の僕には判る。

当時の僕でさえ、屋敷に侵入すれば家人に見つかるのではないかということを懸念してはいた。

だが父への憎しみが僕を突き動かしていた。

「夜もよほど遅くであれば家人が寝静まっているのではないか」

これだけが僕の安全を保障している事由であつたから、それだけを念じて僕は侵入を決意するに至つたのだつた。

父が屋敷から帰ってから数時間後、僕は部屋を抜け出した。

河野家の明かりはおちていた。

この時間であれば当然のことだつたが、僕はそのことに深く安堵し、計画の万全さを自身に信じさせることに成功した。

山から屋敷への侵入は困難を極めた。

夜の山道の危険さを考慮してはいなかったのである。

木の根に引つ掛かつてはこけ、物音に怯え、道なき道を踏破した末に宿りついた、そこは半ば崖のようなもので、殆ど侵入は不可能なのだ。

僕は崖からの侵入を諦め、屋敷の塀を越えることを試みた。

果たして、それは成功した。

塀と山の傾斜が同化しているその部分だけは、侵入者を拒まなかつた。

僕は無駄になつた多くの苦勞よりも、屋敷への侵入を喜んだ。

幾多の苦難を乗り越えた僕の眼に先ず飛び込んだのは大きな庭だつた。

木々は良く整えられ、池がありそこには橋がかかつていて、橋からは母屋へ続く飛び石が蛇行するように続いていた。

普段の僕であれば、はしゃぎ回る様な、村では他に見ることのない

珍しい風景であつたが、そのときの僕は途方に暮れていた。庭のはずれから見える母屋の大きさは、尋常なものではない。

この大きな建物に、幾つ部屋あるのだろうか。

父はどの部屋で悪行を働いたのだろうか。

悪行の証拠はなんなのだろう。

一目見て判るようなものなのだろうか。

侵入してから、あまりにも自分に考えが足りていないことに気づいて、僕は呆然と屋敷を眺めるばかりであつた。

それでも何か得るものがあるはずだと、僕は父への意地だけに突き動かされて、母屋へと近づいていった。

母屋への入り口を僕は捜していた。

全て雨戸で締め切られ、入ることすら困難だつた。

そうして母屋の周りをぐるぐると回つていたとき、蔵の奥にある、この屋敷には不釣り合いな建物に気がついた。十平米はあるうかう汚い建物。それなりの大きさこそあるものの、屋根はトタンだつたし、壁も塗り壁ではなく、朽ちかけた木の合板で、丁度僕の家納屋のような粗末な造りだつた。

そして中からは白熱電球のような、オレンジの明かりが漏れ出しているのだ。

もし、この屋敷に何らかの秘密があつたとするならば、きっとここに違いない。僕は半ば確信していた。

これほど夜遅い時間に、怪しげな建物の中から漏れ出す明かり。

僕は期待を胸に、建物の壁から光の漏れ出す節穴を覗き込んだ。

そこにあつたのは異様な情景だつた。

裸の若い男女が10人ばかり。

妊婦もいれば、子どもも赤子もいた。

ただ大人の男だけはいなかった。

というよりも性別の確認がついたのは女性だけだつた。

大人の女性はそれなりに身綺麗だつたし、子どもの中にもきちんと

髪を切りそろえて、ある程度の清潔を保っている者はいた。そして同時に、子どもの一部は、髪は伸び放題で身体は垢じみており、それが異様な雰囲気醸し出していた。

そしてそれ以上に異様だったのが、その空間の中心にあった、腹を切り裂かれた犬の死体と、その死体から腸を嚙りだしている妊婦の姿であった。

僕が叫び声をあげて、その建物から離れたのは言うまでもない。

そして屋敷から逃げるため塀を乗り越えようと悪戦苦闘しているところで、屋敷の使用人に捕まることとなった。

父が迎えにきて、家に漸く帰ることができた僕を待ち受けていたのは、母の小言であった。

母の怒りは尋常ではなかった。

僕の行動が道徳的に許容されないということ以上に、母は「河野家に対して行ったこと」という点に対して怒っているようにも見えた。そして母は、屋敷で見たことは忘れるようにと言い含めた。

言われるまでも無く、僕はこの件を他言する気は無かった。

僕の中の何かが警鐘を鳴らしていた。

それは、見てはならない、言ってはならない、この世に存在してはならない何かであると僕は感じ取っていた。

未知に対する恐怖が僕の口を閉ざした。

意外なことに、この件に関して父は何も言わなかった。僕が母から叱られているのをただじっと見ていた。その後押入れに閉じ込められ一夜を過ごすことになった僕が、夜中物音で目を覚ますとそこには父がいた。

そのときの顔は一生忘れることは無いだろう。

下卑た笑いを浮かべながら、父は言った。

「お前も、あと何年かすりゃあ連れて行ってやるから、もうちょつと我慢すんだなあ」

僕は父に対して畏怖を感じるようになっていた。

あの時の父の顔が、僕との経験の差を示しているように思えた。

父はあれを知っていて、なおかつ愉しんでいる。

その思いが、自然と父から僕を遠ざけた。

そして数年後、僕は畏怖の正当性を確認することとなる。

僕が中学の卒業を間際に控えた年だった。

夕食後、父は屋敷へ出かけるために立ち上がった。

そして時が至ったことを僕に告げた。

「おい、そろそろいいだろ。おめえも来いや」

いささか拍子抜けするような調子であった。

僕は数年の間、あれの正体について考え続けていた。

あれこれ考えても見たが、結局のところ答えは出なかった。

その答えを得る機会が、いま僕の前にあった。

緊張を自覚しながら、僕は父に続いた。

「あんだ、なにもこの子まで連れて行かんでもいいやない」

母は僕を引きとめようとしていた。

父が屋敷にでかける時の不機嫌な表情ではなく、彼女の顔には不安が見て取れた。僕も父と同じように、あの屋敷に囚われるのではないかという不安だったのだろう。

「じゃあ、こいつに聞いてみる。こういうもんは本人の意思やろが」
僕はただ頷くと、母に背を向けた。

母の気持ちを汲み取ってなお、僕は知りたかったのだ。

屋敷へ向かう夜道で、父はやはりあの顔をしていた。

そして楽しみに僕に話しかけるのだ。

「やっぱりあのとき、あれを見たんだな」

父の言葉の意味を僕は判じなかった。

あの時僕が見たものは、おそらく父の言うものとは違う。

この楽しい表情とあの情景とは僕の頭の中で一致しなかった。

その日もやはり父は他の村人と合流した。

大人たちは意外そうな顔をしていた。

「今日は、ガキもいっしょかい」

「そろそろ時期だと思ってよ、そっちにも、コブがついてるじゃないが」

僕が父の視線を追うと、そこには先輩がいた。

先輩と言っても、在校生の人数が少ないこともあり、僕らはそれほど疎遠ではなかった。

彼は少し怯えた様子で俯いていた。

「うちのガキも、そろそろだと思ってよ」

「近頃ア他の連中の集まりも悪イで、丁度ええんじゃないか」

「そろそろ世代交代かの」

「わしゃまだそんな齡じゃねえ」

大人たちは喋りながら屋敷へ向かった。

僕ら初心者はまだ押し黙っていた。

屋敷の玄関には、河野家の使用人が待っていた。

この男とは、あの日僕を父に引き渡したときにも会っている。

僕が会釈すると、男は僕を見て、はじめて気がついたような顔で、ああと呟くと、なんとも嫌な笑みを浮かべ「あのときのぼっちゃんですな」と父に言う。

父は「ぼっちゃんなんてやめてくださいよ」と、使用人に対しては少しへりくだったような様で、僕はこんな父の姿を見たのは初めてのことであったから、意外だった。

男は僕たちを母屋の一角に案内した。

そこはこの屋敷には不釣り合いな部屋だった。

母屋の、おそらくは最も端にあるその部屋は、畳敷きではなく、板張りでも無く、壁から天井までコンクリートの打ちっぱなしで、窓すらなく、水道の蛇口と朽ちかけて綿の出ているマットレスが2つあるばかりだった。

そして部屋全体に異様な臭いがたちこめていた。換気すらできないような部屋であったから、当然のことかもしれない。

部屋に僕たちを入れると使用人は「少々お待ちください」と言つて部屋を出て行った。

大人たちはなにやら楽しげに話しているが、僕と先輩はこの部屋の持つ雰囲気呑まれて、押し黙っていた。

暫くすると使用人が部屋の扉を開けると「容易が出来まして御座います」と言つが早いか、裸の女を2人ばかり、部屋の中に押し込んで扉を閉じてしまった。

先輩はあまりのことに動揺を隠せない様子だったが、僕は「ああ、あの時の女だ」と何やら感慨深い想いを口の中で弄んでいた。

「あの時の女」というのは正確には違う。

僕はあの時の女の顔を覚えてなどいなかった。

ただ、あの時、あの建物にいた女達と同じ雰囲気、この女達も有していた。女達の立ち振る舞いは、僕の知る若い女のそれではなかった。裸であることに恥らう様子も無い。また、仕草や表情の作り方さえ違ふように思えた。

僕が女を観察しているうちに、大人たちはすっかり裸になって、女の腕を掴むと、強引に自身の袂へ引き寄せた。彼らの下半身には、一様に屹立物が存在を主張している。

そこで漸く僕は父の笑みの訳を判じた。あれは自身の欲望を邪なものと知りつつ、抗うことをやめた者の、誤魔化しの笑いだったのだ。

「おい、今日はガキ共を先に愉しませてやろうじゃないか」

「それが趣向だろうて、おい健坊」

呼ばれた先輩は、未だ戸惑いを隠せずにいる。

それでも、彼らの言う「愉しむ」という言葉の意味は、僕同様、理解しているようだった。彼の陰茎のふくらみ具合から、そう察することが出来たのだ。

「この女は、人間じゃねえ。犬と同じだ。好きにしてもええんやぞ」
「流石に殺しちまったら、河野様に申し訳がたたねえがな」

何が楽しいのか大仰に笑う大人たちを尻目に、女は先輩へと近づいていった。僕は大人たちの言葉と女の態度を見て大体の事情を察することが出来た。

この女はおそらく、人間と言うコミュニティーの枠から外れた者だ。むしろ「外された者」と解釈する方が自然だろう。この女には、この生活が普通なのだ。そう育てられた者なのだ。人間として扱われず、毎夜男と寝ることが、この女の自然な営みなのだろう。無論、そんなことは、この国の憲法にも示されているように、一般的には許されざることだろう。それがこの村では許されている。そこにどんな事情が絡んでいるのかまでは判らないが、この女はこの村では犬として認識され、一般社会からは存在すら知られていない。つまりこの女に何をしたらところで、問題はおきようがないのだ。そしてこの犬の一族はこの屋敷の中でコミュニティーを形成している。それがあの夜僕が見たものの正体だろう。あの建物は、この犬の女達の過ごす犬小屋なのだろう。

先輩が「いや、でも」と渋る様子を見て、大人達は犬を先輩にけしかけた。

「おい、お前がすっかりしねえと、相手は童貞やぞ」
こんなことを言っただけで笑っている。

近づいてくる裸の女に、混乱気味のままマットレスの押し倒された先輩の上に、女はすぐさま跨って腰を振りはじめた。僕はその様を無感動に見ていた。先輩の上で喘ぐ女を見ている、僕の劣情は滾らなかった。

そのときの僕は、本当に犬の交尾を眺めているような気持ちだった。おそらく、村の大人達は、この女が犬であるという建前の元、認識としては人間を抱いているのと同じ感覚を味わっているはずである。僕の視覚情報も、相手を人間の女であると訴えていたし、思考でも

そう考えるより他なかった。だが、感覚と言うものがそれらについてこない。このことに僕は少なからぬ衝撃を受けていた。これが自身の感受性の高さ故のことであると、今の僕はそう思っている。彼女たちがこの屋敷で犬として養育されてきたことを、僕の感覚は鋭く感じ取っていたのである。

「ハナ、おめえはウチの坊主だ」

ハナと呼ばれた犬は僕に近づいてくる。

そして僕のズボンを脱がして陰茎を取り出したが、それは力なく頂垂れたままで、数分間彼女の口内で嬲られた末に、努力の甲斐もなく、やはり元の形のまま吐き出された。

そのとき僕は言いようの無い気持ちの悪さを感じていた。僕にとってそれは、犬の口内に陰茎を挿し入れ、舐られたに等しい。性的興奮など覚えようが無かった。

僕はハナを振りほどき、父に「帰る」とだけ言い残して部屋を出た。父は「ああ」と曖昧な返事を寄越して僕を見送った。

その後、僕は屋敷に行くことはなかった。

屋敷のことを汚らわしいとすら感じていた。父や先輩や村人達が、あの場所で犬とまぐわい続けていることは、僕の中で嘲笑の種であった。僕は、僕だけは人間の女に欲望の糧を求めるのだ。そこに、

生物として、人間として常道を歩み続けるのだという自負が育まれた。そして数年後、都会の街にある大学に進学した。

そこで出会った女性と恋をし、付き合うこととなった。

僕は心の底から彼女を愛していた。

交際も順調だったが、僕のほうに問題が起きた。

彼女との性交が、僕の身体の問題で上手くいかなかった。犬の時と違い、僕は確かに彼女に欲情していた。そして陰茎がそれを示していた。だが、どれほど彼女と身体を重ねようとも、僕は一度も果てることができなかったのだ。彼女はかまわないと言ってくれた。だがそれは彼女が満足しているからこそ言えることだ。僕は一度たり

とも満足したことは無かった。どれほど登り詰めようと、果てることが出来ない苦しみが僕にはあった。彼女は僕の腰の動きに合わせて喘ぎ、ひとりで満足し、果てることの無い僕を慰める。僕はいつしか彼女に憎しみすら抱いていた。

その結果、僕は彼女と別れることとなった。

それから、僕は幾人もの女性と付き合った。だが、結局は同じところでつまづくばかりだった。医者にもかかったが、精神的なものであると診断され、心のつかえが取れない限りは治ることはないと言われ、僕は絶望した。

僕の運命は意外なところで転機を迎えることとなった。

それは深夜のテレビ番組で動物の特集が組まれているのを見たときだった。テレビの中では2匹の犬がじゃれあっている。そして2匹は次第に盛り上がり、雄犬が雌犬の上に乗りかかり、腰を振りはじめたのだ。

それを見たときも、やはりこれと言って感想も無く、「テレビで放送しても良いものなのかな」と誰しもが抱きうる感想を漏らすだけだった。

それは番組も終わり、僕が寝るために立ち上がったときだった。僕は寝巻きのズボンが濡れていることに気がついたのだ。僕がすぐさま寝巻きを脱ぐと、僕の股間はねっとりとした粘液にまみれ、陰茎からは粘液が滴り落ちていた。僕の精通だった。

何が必要であるのか、その日からは色々なことを試した。

その日夕食に食べたものをもう一度食べてみたし、聞いた音楽や、触れたもの、嗅いだもの、感覚に携わる全てを僕は試した。

結果、その要因は犬の性交であった。

僕は犬の性交の写真や、動画を見ては自慰にふけるようになった。

それは人間にとって最も原始的な快楽である。

僕は20歳にして始めて性的な快楽を覚えた。

そして溺れきった。僕は犬に欲情しているのではない。僕は犬でな

いと達することの出来ぬ身体だったのだ。それが証拠に、犬の写真を見ても、僕の下半身は屹立しないではないか。僕は女性の裸の写真などで陰茎を奮い立たせてから、犬の写真で自身を慰めていた。あの日、犬と性交する先輩を哀れに思った僕が、犬を見て自慰にふけている姿はあまりに滑稽だったろうと思う。けれど僕は、決して自分を哀れな存在とは思っていなかった。少なくとも犬に劣情することの無い分だけ、先輩よりも上等な人間であると考えていたのだ。だがその思いすら打ち碎かれることとなった。

僕は次第に河野屋敷で見た情景を思い浮かべるようになっていた。犬で自慰にふける僕の境遇が、それを思い出させるに至ったのは、至極自然な流れであるともいえる。あの時のハナを思い浮かべると、いつの間にか僕の陰茎は猛るようになってしまった。そしてハナを思い浮かべては自慰にふけるようにすらなっていた。

僕があの時、ハナの身体を思うさま味わうことが出来なかったことが、僕の心理の深い面で後悔を感じさせ、むしろ味わうことが出来なかったからこそ、妄想の中でのハナの身体は甘美な快楽を僕に与え、次第にそれは膨らみきって、僕を犬へと走らせたのだ。

あの時の情景が強烈に僕の中に刻み込まれ、犬でしか絶頂できぬ身体になったと考えれば、僕はハナを憎んでも良いはずであった。けれども実際にはその逆で、僕は次第にハナの身体を貪りたいと考えようになっていた。同時にそのことは酷く僕のプライドを傷つけた。

その結果、僕の神経は錯誤をはじめることになった。河野屋敷の犬を望むことは、人間としての尊厳を傷つけることで、代替行為として実際の犬を求めることは、むしろ正当であるとすら感ずるようになっていた。

僕は日課としていたペットショップでの犬の観察が、その日で終わることを感じていた。今日、あの店にいる犬を見れば、僕の中の闘

ぎ合いに決着が付くのだろうということを確信していた。この数週間、毎日のようにショーウィンドウの前で続けてきた葛藤が、馬鹿らしいものだとさえ思っていた。思考よりも感覚を重視したほうが、人は遥かに幸福になりうるのだ。

僕は一通り観察してから犬を購入しようと、ショーウィンドウの前に張り付いていた。けれど、そんな僕の思いをあざ笑うように、犬の入った檻は店員の手で店の奥へと消えてゆく。その先には財布を手にした女がいた。

あの犬は僕が目をつけていたものだ。

ハナには及ぶべくも無いが、他のどんな犬よりも、劣情のふり幅が大きかった。あれを手に入れ損ねれば、僕は少なからず後悔することになる。そんなものはあの日の河野屋敷でハナを抱き損ねた、あの一事で沢山だ。

僕は店の中に駆け込むと、女の前に対峙した。

「君、その犬は」

ここまで言ったとき、僕は気がついた。

女の顔、それは僕が毎晩のように妄想の世界でキスをし、抱き合い、身体を重ねている存在とあまりにも似ていた。そこにはハナがいた。

彼女がハナではないことは、僕にも良く判っていた。

それでも、外見だけは確かにハナとしか見えなかった。

「あの、お知り合いですか？」

店員の問いにも、直ぐに答えを出すことが出来ない。

僕の思考は混乱を極めていた。

「これから知り合いになるんです」

彼女の言葉は僕にとって、内容の意外さよりも、ハナであることをはっきりと否定された事の方が、余程大事であった。

僕の手を引いて店を出る彼女の背中を見ながら、僕は彼女の存在が僕の違^{たが}ってしまった人生を常道に戻してくれるのではないかという

希望を見出していた。

彼女は僕を積極的に誘い出した。

そして逢うたびに、彼女の姿を見る毎に、彼女をハナと錯誤していく僕がいた。ハナが人間であつたならば、きっとそれは彼女なのだ。これらの思考と、僕の出した結論は、必然的なものであつた。

「君が好きなんだ、僕と付き合ってくれないか」

「犬と、恋人になるの？」

彼女の言葉に僕は驚いた。

まさか、彼女は気づいているのだろうか。

君は犬じゃない。そう否定しそうになつたが、僕の告白が、彼女に背を向けて彼女の飼う犬と戯れながら告げたものであるという点に気がついて、僕は喉まで出かかつた言葉を飲み込んで、今度は彼女の方を向いての告白に成功した。

彼女は告白を受け入れた。

僕は彼女に好かれようと努力した。彼女は僕にとって唯一の希望であつたのだ。ハナと瓜二つの人間が他にいるとは思えなかつた。彼女を手放すわけにはいかないのだ。

今までの僕の恋人達の前では、僕は寡黙な性質を貫いていた。

あえてそうしたのではないが、これほどまでに別離に対する強迫観念に駆られたことは、今までは無かつたのだ。それは彼女を愛していたからではない。彼女は僕にとつて、人生の常道を得るための手段だつた。彼女自身が目的ではないのだ。僕はハナを愛していたわけではない。ただ、ハナに欲情していただけであつた。彼女がハナに良く似ていたからといって、僕が彼女を愛するわけでは無い。僕はハナの呪縛から自身を解放させる為に、彼女を愛している演技を続けていた。彼女の身体を貪り、満足を得たとすれば、それが人間の女を愛する起点となる。満足を得られなかつたとしても、あのと
きハナへの妄想はそこで断ち切ることができると思つていた。

彼女は僕のことを知りたがった。

僕は彼女から尋ねられる度に、まるで詰問を受けているような気分を味わうこととなった。それは彼女の質問が、僕の性質を半ば見抜いていて、それを確認するための言葉のようにも感じられたからだ。

「犬が好きなの？」

僕は犬が好きなのではない。

犬に欲情しているのだ。

けれどそんなことを彼女に言うわけにもいかない。

「ああ、犬は、好きだな」

「どういうところが好きなの？」

「その、ああ、なんだろう」

僕は言葉に詰まった。

彼女は言葉を重ねる。

「じゃあ私は好き？」

やはり。そのときの僕はそう考えた。

彼女は全て知っているのではないか。

犬に欲情する異常な人間であることを。その苦悩を断ち切るために彼女を利用して、ただ、そのための交際であって、僕が彼女を愛していないことを。

それでも、僕には否定するより他に道が無い。

僕の声は自身の予想すら超えて、大なるを極めた。

「好きだよ、決まっている。なんでそんなことを今更聞くんだい？」

彼女は驚いたような顔をしていた。

この驚きは、一体何に對してのものであるか、僕には判りかねる問題であった。いづれにせよ、僕に出来ることは、彼女に僕の愛を信じさせることだけだ。

そんなことを考えていたからか、彼女がその後何と言ったのか、そして僕が何と答えたのかは覚えていない。ただ、今日のところは彼女と距離を置く必要があると感じた僕は彼女の前から立ち去った。

その日家に帰った僕が導き出した結論は、急いで彼女と添い遂げることであった。兎に角、それさえ済ませてしまえば、あとはどうなるかと知ったことではない。次の日からの僕の行動は全て雰囲気を作るためのものであった。

僕は彼女に花束を贈り、キスをした。恋愛映画を見て、別れ際に抱き合ったりもした。これらの行動は功を奏したようで、彼女からも積極的に僕の身体に触れるようになっていた。

一月を待たずして、僕は彼女の部屋に足を踏み入れ、そして彼女と酒席を共有することにさえ成功したのである。

彼女はいささか拍子抜けするほど容易く酩酊した。

そして僕の肉体を受け入れることを承諾した。

僕は彼女の着衣に手をかけると、まるで贈り物の包装を剥がす子どものような気持ちになったが、一定の冷静さを保って、雰囲気を壊さぬように気を遣いながら、脱がせていった。

彼女が完全に自然の姿をさらけ出したとき、僕は感動すら覚えていた。彼女の身体は、あの時僕が得ることの出来なかったハナの身体とまるで同じだった。彼女は常のとおり、言葉少なかったが、その表情には僅かな恥じらいがあり、また、乳房や秘所を手で覆う仕草からも羞恥の念が見て取れたが、その点においてハナとの違いを示すばかりであった。

「もつと、よく見せてくれないか」

僕の言葉は自然に溢れ出たものだった。

彼女はそれを不審には思わず、僕に身体を開いて見せた。

辛抱もこれまでとばかりに僕は彼女を抱き寄せると、「あつ」と小さく彼女は呻いたが、それきりなんとも言わないので、僕は彼女の身体をまさぐった。そして、彼女の秘裂をなぞるように幾度か愛撫を加えると、息とも声ともつかぬ声をあげ、彼女は顔を手で隠した。僕がそれを快く思うはずが無い。彼女の顔と身体と、ただそれだけ

に価値があつたのだから、それを隠すことはこの際、罪ですらある。
「顔を隠さないで」

僕の言葉にも彼女はかぶりを振って、聞こうとしないものだから、僕は強引に彼女の腕を取り、唇を重ねた。そして、キスを交わしたまま、既に微かなふくらみを見せつつある陰核を包む粘膜の上から扱くように擦ると、「ああっ」と声を上げたまま彼女は果てた。

僕は、荒い息を吐きながらだらりと弛緩した彼女の足に手をかけると、左右に押し広げた。そしてその奥にあるものの姿を確認すると、おもいがけず、頬が緩んでいくのを自覚した。薄い茂みの下にある彼女の秘所は、赤く熟れきってだらしく粘液を垂らしていた。

僕はいきり立った怒張を、躊躇うことなく彼女の秘所に押し当て、勢いをつけて捻じ込んだ。彼女の痛みに耐えるような顔を尻目に、僕はただ腰を振り続けた。ねっとりとした褥は、彼女の表情と背反するように、僕に甘美な快楽を与えた。僕は夢中だった。過程が僕に与える快楽など、それほどのものではなかった。僕にとって重要なことは、彼女の肉が、僕を天井へと押し上げるか否かであったのだ。

粘ついた音が室内に響き渡る中、僕は自身の悦楽が、高みに登り詰め、いまや果てんとしていることを感じ取った。そして扉に手をかけようとしたとき、扉には鍵がかかっていることに気がついた。与えられた結果は、今まで付き合った人間の女達と同じものであることを、僕は自覚せざるをえなかった。

僕は彼女の横たわるベッドに、腰をかけ、考えを巡らせていた。もし彼女が僕を満足させることが出来なかったとすれば、ハナの身体とて、その程度であつたということ。僕のハナへの妄想はそこで断ち切ることができる筈であつた。けれど、僕の想いとは裏腹に、身体はハナを求めている。

「違う。違うんだ」僕は呟き続けた。

こんな筈ではなかった。

僕は彼女と添い遂げることで、どう転んだとしても、ハナへの妄執を断ち切ることが出来るはずだった。その想いが裏切られたとすれば、どうすればよいのだろう。

僕は彼女の部屋を出た。

そして自身の家にすら帰らず、幾日もの間、公園で呆けたままでいた。このとき、既に僕の精神は現実を乖離し始めていた。僕ははじめから、素直にハナを求めれば良かったのだ。帰郷して、河野屋敷の門をくぐることに僕にとっての最善であったのだ。けれどこのときの僕がそれに気づくことは無かった。ただハナを求めてはいけない、それだけは禁忌であるようにすら感じていた。それは、僕が長年抱き続けていた、村人への優越意識と、この数ヶ月の僕の有様を弁護したいがために自身を騙し続けたことの、結果だった。僕はすっかり、ハナを抱かれないことが自身の尊厳を守りうる唯一の手段であると信じきっていたのだ。そのためには、どんな行動でも正当化される。それが狂った僕の脳がだした答えだった。

僕は再び彼女の下宿の前に訪れていた。

その行動は、あの日彼女の前から黙って姿を消したことを詫びるためではなく、彼女に真実を語り、別れを告げるためでもない。僕はただ、自身の尊厳と、欲望とを両立させうる唯一の手段を求めて、この場所に訪れたのだった。僕は彼女の犬を掻き抱いた。犬は、何も判っていないような風情で、僕をみつめて泣き声をあげる。その声が、僕の滾りをいやがおうにも高めていた。

犬に向かって腰を振り続ける僕には、既に客観的な思考を失っていた。ただ、高く細い声を上げて泣き続ける犬に、何度も何度も欲望を放ち続けた。夜が明けて、朝が来ても。僕は永遠の悦楽を味わい続ける。

失ってしまった未来と、閉ざされた人生。守り抜かれた尊厳、それ以外を全て忘却の彼岸に追いやって、快楽を貪り続ける。僕だけが住む、孤独の法悦郷で。

主家編 1

当たり前に思っていたことが疑問に代わる瞬間というものは、ある意味では人の生が新鮮さに溢れているという証かもしれない。世界は人間の脳では喰らい尽くせぬほど膨大な質量を持っている。情報化されているものが一部なら、ひとりの人が死ぬまでに抱え込めるものは情報の一部だろうと思うのだ。与えられた情報も、彼の人にとっては事実であっても、此の人にとっては事実でなかうというような曖昧なものばかりで、その中から、なるべく客観的なものを選んでみたところで、自分にとって事実でなかったということもままある。結局のところ、真実というものは、目の前に広がる膨大な質量と、それを見て聴いて触って、自身で情報化した知識だけだろうと、僕は結論している。

殊更に僕が思索にふけてみせるのは、この1ヶ月というものの彼女の妄想ばかりしていて、それが遠からず実現することへの興奮で、脳の働きが活性化したことによるものであるうか。そしてまた、僕は今組み立てたばかりの理論を脳の片隅に押し遣って、十年前ぶりに会うことになる彼女のことを思い浮かべ、十数年前の彼女との出会いに思いを馳せるのだった。

僕の家には沢山の犬が飼われていた。少なくとも父母は大真面目にそう言つてのけたし、故に僕もずっとそう認識していた。認識にずれが生じたのは、僕が10歳になる年のことだった。平生から、不衛生を理由に近づくことを禁じられていた犬小屋の前を通りかかったのは、偶然のことであった。まだ四月になったばかりだというのに、僕は端午の節句を心待ちにしていた。この行事が始まる十日ほど前から、鎧兜や五月人形を飾るのが、我が家の常なのだ。

この鎧兜は、実際に数百年前に先祖が使った本物である。僕の家である河野家は、大きな戦いに敗れた後この村に隠れ住み、財をもつて村人と和を結び、身分を偽って村の庄屋となりおおせたのだと、父から教わったことがある。このことが真実であるかは不明だが、少なくとも武家が先祖であったことは、鎧兜や刀剣の古めかしさから、事実でなのではないかと推察している。

この鎧兜が蔵から出されるのはこの時期だけのことで、それだけに期待は膨らむばかりであった。先走った僕が蔵の中に入ろうとしたことは、子どもらしい短慮な行動ではあったが、今思い返せば微笑ましい心地もするのだ。その結果、蔵の隣で水浴びをしている彼らを見かけたことは、僥倖といえる。

僕の家は屋敷と呼ばれる程度に大きかった。屋敷の塀は山を背にして三方をコの字のように囲んでいて、裏手にあった山の裾は崖と言っても差し支えなからう。その断崖を海岸線に見立てると、一部に湾のように窪んだ空間があった。その湾の中に収まる形で犬小屋は存在していた。湾は人工の産物で、犬小屋を少しでも隔離しようという意図がみてとれた。不衛生であったこともあり、犬小屋の存在する理由を考えれば、僕の祖先が、その存在を忌まわしいものと考えたのかもしれない。犬小屋の前には蔵の壁と屋敷を囲う塀と母屋の壁とに三方を仕切られた広場（ただ空間といふべきかもしれない）がある。蔵の前に立てば、左に何も無い広場があり、右によく整えられた庭園が見える。この風景が家人と彼らとの歴然たる差を示しているようにも思えた。

普段の彼らは日中、外に出ることを禁じられているのだが、時々本の虫干しでもするように日光を浴びることを許可され、彼らは広場でのみ屋外に存在していられた。そのときには季節に関わらず、放水され、粗雑に洗われるのだ。僕が一人で蔵に近づいたのはこれが初めてのことであったから、彼らの水浴びを見たのもまた、はじめてであった。それどころか、僕にとっては彼らが集団にいるところ

を見たことさえ、初めてのことなのだ。僕が年に一度、犬と呼ばれる人を目にする機会があったのは、彼らのうち最年長のものが、身体を布で覆ったなりで、広場の前で当主である父から、赤飯と僅かな酒を下賜される年賀の儀式でのみであった。

このときの彼らは一人残らず丸裸で、屋敷の使用人が2、3人がかりで、ひとりづつ押さえつけては粉石けんとスポンジでもって身体を洗っている。僕はその様をみて、ああ確かに彼らは人ではないのだなあと感想した。そうであればこそ、大人のような体つきでありながら水を嫌がって逃げる、子どもじみた行動も、得心のいくものだった。

彼らは一様に若く、最年長のものも、三十路になるかならぬかといった風で、大人の中には男性が一人もいなかった。この事情は後に知るところとなるのだが、このときはそのことに疑問を抱くことも無く、全身を濡らして震えている女、子どもの群れを、物珍しげに眺めるばかりであった。

そのうちに僕は一对の視線に気がついた。

僕と変わらぬ年頃の少女が、じっとこちらを見ているのだ。僕はその視線に手招きで持つて応えた。それは好奇心だけの裏表も意味も無い行動であった。呼び寄せて苛めてやろつとか、同情を覚えて慰めてやろつとしたとか、意図があつて起こした行動ではなかったのだ。

果たして、彼女は僕のほうに駆け寄ってきた。使用人たちはそれに気づかず、二十歳ぐらいの若い娘の身体をやけに熱心に洗っている少女が目の前で、顔を覗き込んできたとき、僕はどうして良いか判らずに、無闇に視線を彷徨わせた挙句に、初歩に帰って「こんにちは」と益体もないことを呟いた。それを聞いた彼女の反応もまた、不思議なものだった。

「なにをするの？」

挨拶をすれば挨拶が返つてくると考えていた僕には、彼女の言葉は奇妙に聞こえた。言葉が通じないのかとさえ考えた。はじめからこの考えに至らなかったのは、年賀の儀式で彼らの代表が言葉を使っていたことに拠る。

なんと返答すればいいのか悩んでいる僕に、彼女は重ねて「なにするの？」と疑問を投げかけてきた。僕は咄嗟に「遊ぶ」と口にしていった。何もすることが無いということは「遊ぶ」ことに直結している、実に子どもらしい思考である。けれど僕にとっては異なる意味を持っている言葉だった。この言葉が自身の中からするりと出てきたことに驚きを隠せなかった。そして言った後で「この言葉は通じるのか」と疑問に思った。

僕の疑問に、彼女は満面の笑みで応えた。

僕は丸裸のうえ全身濡れ鼠で震えている彼女を、母屋の風呂へと案内した。そこで僕も丸裸になって、風呂場に入った。昼間のことで風呂は沸いていなかった。僕と少女は、二人でシャワーを浴びたのだが、温水を浴びたときの彼女のはしゃぎようといったらなかった。凄、凄いと連呼して、ホースやら蛇口やらをやたらに弄っている。水道設備を見たことが無いのかとも思ったが、先ほどまで広場で放水を受けていたのを思い出して、わからなくなる。そして「凄、あつたかい」という彼女の言葉で、漸く判った気がした。

「お湯を見たことが無いの？」

僕は疑問を口にした。

「いっぱい出るのはいないよ。凄、いっぱい出る」

彼女があまりに楽しそうにするので、僕はなんだか嬉しくなって、浴槽の中にお湯をためて、彼女と入った。僕の家のお風呂は、三平米ほどの大きさで、当時の僕には泳げるほどに大きかった。僕達のはせるまで遊び、洗い場で転がって寝ているところを家政婦に発見されたのだった。

その夜の母の怒りは凄まじいものだった。犬小屋付近に一人で行ったこと、犬を家に入れたということ、犬と遊んだこと、その日の僕のとった行動は全てが怒りの対象だった。反面、父はそれほど怒ってはいないように見えた。「あまり感心はできない」と言っただけ、部屋へと引き取った。

このときは母の怒りの勢いに押されて、疑問を口には出来なかったが、僕の中で確かに何かが変わり始めていた。彼らと遊ぶことを禁ずるに、不衛生を理由にするのならば、清潔にしてやれば遊んでもいいのか。そもそも何故彼らは不衛生なまま敷地内で飼われているのか。この疑問は、あれだけ人間らしい少女を見た後のことだから出たことともいえる。犬だと考えていたなら、疑問も無く不衛生な状態を当然と感じていただろう。僕には彼女を人間としか思えないようになっていた。僕と違うところが少なからずあるにせよ、言葉を使い、知性も僕と変わらぬように感じた。それが、ああも差別的に扱われ、遊ぶことを禁じられるのは理不尽に思っただけだ。

僕は、また彼女と遊びたいと考えていた。

子どもの少ない村であつたから、同じ年の級友はいなかったし、家庭教師がついて家で勉強することが多かった。此の頃の僕は、年齢の近い子どもたちからも付き合いが悪いと仲間はずれにされがちであつた。また、村では河野家の人間は何かと特別視されることが多く、稀に遊びに混ぜてもらつたところで、子どもたちの親に見つかる。「一緒に遊んで失礼があるといけませんから」などと言って引き離されることが多かった。

僕は一人で家のなかで遊ぶことが多くなった。そのうち僕の中で誰かを遊びに誘うことは勇気のいる行動になってしまった。テレビ番組も満足に見させてもらえなかったし、流行の遊びも良く判らなかつたので、大抵は本を読んで過ごしていた僕が、遊び相手を満足させられるのか。そんな風に悩みながら、野山で遊びまわっている級友達を横目に自宅に帰るのが、僕の常であつた。

だから彼女を目の前にしたとき、簡単に遊びに誘えたことが驚きだったし、その結果、彼女をさせられたことが、喜びであったのだ。おそらく彼女を容易に誘い出せたことは、彼女を犬だと感じていたからこそで、結果的に彼女を人間と考えるようになったのは皮肉としか言いようが無かった。

次の日から、使用人たちの監視が厳しくなったことを僕は感じ取っていた。おそらく母が、犬小屋に僕を近づけないよう、言い含めたのだろう。使用人の視線を常より多く感じ取るようになってからの僕は、いつも以上に模範的に行動した。使用人たちも、余計な仕事を抱え込みたくないのだ。僕の見張りに常に誰か一人ついているということは、それなりに負担だろう。ならばその気遣いがないことを示してやれば、直ぐになおざりになるであろうと考え、それを実行した。そしてそれは的中することとなった。

監視がついてから一月も経たないうちに、彼らは母から与えられた新しい職務を放棄した。僕は母の留守を狙い、使用人の忙しい時刻を見計らって犬小屋へと駆け込んだ。

犬小屋の中で、彼らは皆一様に寝入っていた。

未だ日も翳らぬ時刻であるにも関わらず、大人も子どもも揃って寝ていることが、僕には不思議だった。彼らが夜行性なのではないかと疑ってもみた。けれど、それはこの際関係の無いことで、とりあえずは目的を果たすために小屋の中に電灯の在りかを求めた。隙間だらけの合板の壁は節穴から僅かに西日が指して、目が慣れば、それなりに小屋の中を見渡せるようになった。僕は天井にぶら下がった白熱電球のスイッチをひねった。その光は漸く小屋の暗さに慣れ始めた僕の眼には余りに眩しく、思わず目を瞬かせた。その光がやはり彼らの目蓋越しの眼球をも刺激したようで、ひとり、ふたりと目を擦りながら起き上がった。

僕が「あの」とこれだけ言って黙り込んだのは、今更になって少女

の名前が何であつたのか教えてもらっていないことに気がついたからである。仕方が無いので、眩い光の中目を凝らして彼女を捜す。そして直ぐにその姿を確認できた。

「君、ああ名前を聞き忘れたんだ。ごめん。それより、あの」

僕の言葉はちつとも要領を得なかつたろう。今更になつて、僕は彼女を遊びに誘うことにしり込みをしていた。それは彼女を人間だと考えてしまった結果に拠るのだが、この時、僕にそのことに思いをいたすだけの余裕は無かつた。兎に角、僕のことを思い出してさえくれば、彼女は微笑んでくれるはずだと、それだけを頼りに僕は少女に近づいた。すると彼女は、怯えるように後ずさるのだ。

「僕だよ。忘れたかな」

彼女はただ頭を振るばかりで、僕が近づくことさえ拒んでいるように思えた。僕はそのときになつて、この空間に自分がいることへの心細さを感じるようになった。ここは明らかに僕の過ごしてきた世界とは違つていて、全てが僕を拒絶しているように感ぜられたのだ。部屋にこもる獣臭い臭いも、眩しすぎる電灯の明かりも、彼らの視線も、そして彼女でさえも、僕を追い出したがつているように思えた。

僕は床にしゃがみこんで静かに泣いた。ここでは大声を出して泣くことすら憚られるように思えたので、必死に声を押し殺して涙を流した。

ふいに僕は頭部に違和感を感じた。顔をあげると、彼女が僕の頭を撫でていた。そして何度も「ごめん、ごめん」と謝るのだ。彼女が余りに優しいので、僕の涙は中々止まらなかった。

涙がひきはじめて、漸く僕は彼女の顔を見ることができた。目が合うと、彼女は顔いっぱい笑顔に僕に差し出した。それを見て、僕も笑った。

「申し訳御座いませんでした、大輔様」

僕に対して謝罪する声が、小屋の奥の方から聞こえた。そちらをみ

ると、年賀の儀式で見知った、彼らの代表者がそこにいた。「あの人、シロ」彼女は代表者を指差して、そう言った。そして次に自分を指差して「ハナ」と言った。僕は漸く彼女の名を知ることが出来た。僕が口の中で何度かハナと呟いてみせると、彼女は僕を指差して「ダイスケサマ」と言った。「様はいらない」と僕が言うのと、「ダイスケ？シロがダイスケサマ言った」と眉間に皺を作ってみせる。どう説明したものかと考えていると、今まで僕達の様子を見ていたシロが口を差し挟んだ。

「大輔様、ここに来るのはお止めください」

大人から叱られたことで、僕は萎縮した。するとシロは笑う。そして「お父様にそっくりですね」と言った。僕が押し黙っていると、シロは続けた。「お父様も、子どもの時分に、ここに忍び込んだことがあります。大輔様の叔父様と共に。叔父様は、他の人間の方と同じように、身分の区別を付けられましたが、お父様は大輔様のように、同じ視点に立って話すお方でした」

僕がハナを屋敷に招き入れたことへの、父の態度が漸く判った気がした。きっと父も僕と同じ気持ちでもって、彼らと接していたのだろう。だから僕はシロに言った。

「だって、貴方は人間じゃないですか」

この言葉を聞いたシロの表情は暗かった。

そして呟くような調子で言った。

「やはり、同じ事をおっしゃるのですね」

この日のシロはこれ以上、僕の来訪を拒むようなことは言わなかった。しかし帰り際に「今日あったことを、お母様には内緒で、お父様にお話なさい」とだけ言った。僕はもとよりそうするつもりであったから、頷いて見せた後、ハナに「またね」と言っって小屋を出た。

その夜、書斎で父に事情を話してみたところ、はじめ少しばかり驚いて見せたものの、あとは平静を保った態度で、僕の話を最後まで聞いていた。そして腕を組んで溜息をひとつ吐くと、「何から話し

たものやら」と天井を仰いだまま黙り込んでしまった。僕は父が何か話し始めるのを待ったが、いつまで経っても何も語らないので、催促しようとした矢先に、口を開いた。父の語るところは下のおりである。

「シロが私に事情を話せといったのだとしたら、それは私に説明の義務を委ねたということだと思う。私が右往左往して手に入れた事情を、息子のお前が私を介して簡単に知ることが出来るのは、羨ましいやら嬉しいやら。それにお前が私と同じ壁に、自力で行き当たったことは、誇りに思えばいいのか、悲しめばいいのか。まったく感情の整理がつかないのだが、兎に角、これは先駆者としての義務と言ふものだ。シロが私に説明を委ねたことは、正しいことだろう。

子どもの頃、私と弟、お前の叔父さんは犬小屋に忍び込んだ。あの小屋は、屋敷の中でも特に目を引くからね。ここで育った子どもは、誰でも興味を持つのだろうと思う。だから私も、なにか特別なきっかけでもってあの小屋に近づいたのではない。

小屋の中には、お前も見たとおり、犬がいた。そのことは判っていたのだ。あれが普通の犬とは違うということは、判るね？私は、それ以上の認識など、持つてはいなかったのだ。あの小屋に、本来犬と呼ばれている生き物とは違う、けれど犬という呼称が与えられたものが住んでいる。その程度の情報しか与えられていなかった。与えられた情報の中から、犬と言うのは獣型のもものと人型のものがないと、そう分析していた。それ以上、深く考えようとはしなかったのだ。それは、お前もそうだろうと思う。

私は、犬小屋の中に居たものを見て、話して、それが人だと考えた。そして、ここに人が閉じ込められていることを不自然に思った。弟が、優越意識を抱いて、彼らに理不尽な仕打ちをしたのを見て、怒りを覚えた。だが弟ばかりを責められないのだ。この屋敷の人間も、後に詳しく話すが、村の人間も、それを当然と思っている。大人たちはあれが人だと気づいているだろう。それでも殆どの者は、彼ら

を虐げることを望んでいるし、心の拠り所にさえしている。古来から賤民とはそうした意識から生まれるものだ。

私もお前と同じように、両親に、お前の祖父や祖母にあたる人から、不衛生を理由に小屋に近づくことを禁じられていた。お前は、私が齡をとってから生まれた子どもだから、会ったことは無いだろうけれど、私の両親は私達兄弟には遠い存在だったものだ。今よりずっと封建的な家庭だったのだ。

私はこの件に関して、両親に正面からぶつかった。彼らを解放しようという気持ちより、寧ろ疑問の方が強かった。何故こんなシステムが存在しているのか、判らない。それを知る機会を求めた。

けれど実際に、私がこの疑問が解決したのは、何年も後のことだった。両親は子どもだからという、納得できかねる理由で、私に何も教えなかった。今となつてはこのことに納得も出来るのだが、この当時はそれを理不尽に思つたものだ。色々やってみたよ。ハンガーストライキをしたこともあつたし、彼らを逃がそうとしたこともあつた。子どものすることだから、どれも失敗したのだが。

私が十五の冬に、ついに疑問が解けることになった。十五になった嫡男は、儀式に列席を許される。お前もその齡になれば、見ることになるだろうから、それまでは詳しいことは言わないが、彼らの中から一年に一人、殺すのだ。それも残忍な方法で。何故こんなことが続けられているのか。因習としては馬鹿げている。何十年前ならまだしも、今でもこれが続けられていることには、理由があるのだ。私達の先祖が、大きな戦いで敗れ、落人としてこの村で暮らし始めたことは、話したと思う。彼らの中に恨みを募らせるものが、当然いたのだ。彼らは仇敵を呪い殺すことを決意した。呪いなどあるはずがないと思うかもしれないが、先ずは話を聞いてみてほしい。

その方法は、犬神だった。犬神と言うのは、犬を殺してその霊を人に憑かせる、憑き物現象のことだ。この地方では、昔から民間でも

行われていたそうだと。この呪術は、人を殺せるほどの効力が無い。精々狂わせる程度なのだ。先祖はこれでは不服と考えたのだろう。もっと知能があり、効果の大きい生き物を探した。それが人だったのだ。

犬小屋に飼われている人間は、まさにそのための生贄だ。そのためにだけに飼い殺した、犬として育てられた人間なのだ。ただ、これだけなら、恐ろしい昔話として終わるところなのだが、もっと恐ろしいのはこの後のことなのだ。

果たして呪いは完成し、仇敵は殺された。彼らは大いに喜んだろう。けれどそれだけでは終わらなかった。仇敵の死んだ一年後のことだ。一族の、それも弱いものから先に次々と変死を遂げた。子どもや女性、髪も歯も抜けきり、全身の皮を剥がれて死んだ。一年に一人づつ、呪いの儀式の日に。

原因は、人間を使ったことによるものだった。呪いの目的を遂げたヒトガミは、次に自分を残忍に殺した河野の一族に牙をむいたのだ。彼らは犬のように飼い主に従順でもなければ、愚かでもない。知能の高さは呪いの効力を増したが、その力は制御できる範囲を超えていた。

彼らは毎年、儀式のあった季節を怯えて過ごすようになった。そしてその解決策を、模索した。けれど、結局のところ根本的な解決は今に至るまで出来てはいない。今、一族の者が誰も変死しないのは、問題を先送りしてきたからなのだ。

先延ばしにした、その方法は、新たな生贄を捧げることだった。それはヒトガミを新しく作り、以前に作ったヒトガミを駆逐するという手段だ。けれど結局は新たに作ったヒトガミも、一族に牙をむくこの手段を用いる限り、一番初めの儀式をした日に、ヒトガミを生み出し続けなければならないのだ。

信じられないかもしれない。けれどこれは事実なのだ。おそらく、

結果的に一族が滅ぶことになっても儀式を止めようと考えたものはいただろう。私もその一人だ。私は父に、儀式をやめるように頼んだ。きつと呪いなど嘘だ、もし本当だとしても、他の人間を殺して保身を図るなどありえないではないかと。

この私の頼みを、父は意外なほどあっさりと承知した。お前に責任が負いきれるのなら、とそれだけ言つて、儀式は止まることになった。ただ、一年間は犬を解放するのを待つことが条件だった。

私は十五になったことで、自由に犬小屋に出入りすることが出来た。そして、その他の儀式にも。そこで犬の一族が、どうやって数を保っているのか、それを知ることとなった。

彼らは村人と毎夜交わることを義務づけられているのだ。人間としてすら扱ってもらえぬ相手と、行為を強要されるのは、苦痛だろうと思うし、ましてやその男の子を孕み、また生まねばならないことは、残酷なことだろう。

これは、生贄の数を確保することは勿論、村人を共犯者に仕立て上げる手段だった。それに、この呪いの怖さをしっている村人には、断りようもなかったのだろう。そしてそれ以上に、村人達は愉しんでいた。これがこの儀式がその秘密を保ち続けている理由なのだ。もっと大きな、確実な理由もあるが、このときの私はこれが全てなのだと考えていた。

一年間だ。あと一年耐えることが出来れば、解放されるのだ。私は犬小屋におもむいては、彼らを励ました。けれど、彼らにとつてそれは当たり前の日々で、なにひとつ疑問に思うことは無かったのだろう。彼らは涙ながらに詫げる私を、不思議そうな顔で眺めていた。私は彼らを教育しようと思った。シロに会ったといったが、彼女は実に流暢に敬語を使っただろう。あれは私が教えたのだ。少しでも人間としてのプライドや知性を取り戻して欲しいと、私は願っていた。そこで幼かったシロに言葉を教え、知識を与えた。そうして日々が過ぎていった。

一年後のことだ。弟が白昼の学校で、変死を遂げた。授業中の教室で、生徒や教師の見守る中、無残な死体になっていったそうだ。私はそのときになってはじめて呪いを信じることになった。私は第一人の死に対する責任すら、耐え切れぬほどの重圧に感じた。次は私の番だと考えると、恐ろしくもあった。

そんな私に、父は告げた。「お前が死んで、私達が死んで、それで終わると思っているのか。ヒトガミ造りで実際に犬を殺した村人は勿論、呪術に関わった村人、毎晩犬どもを犯した連中。その家族。ヒトガミはその全てに牙をむく。その責任を、全て一人で負いきれるのか」

私には無理だった。ヒトガミ製造の儀式は、かなり多くの人に関わっている。過程から考えて、知らずに関わった人も多くいるだろう。その全ての人の死を私ひとりの善意を理由に強要するのか。そんなことが出来るはずも無い。結局、私は今日までこの因習を続けることとなった。

死の直前まで、せめて人らしく生きて欲しいと続けた教育もやめることになった。いずれ保身のために殺さねばならない相手に優しさを分け与えることは堪らなく苦しい。そして犬のように扱われる運命の中、人としてのプライドや知性を持つことは苦しみでしかない。と、シロが言ったからだ。

こうして今日に至るまで、彼らは犬のように生き、犬のように死んでいた。お前が家を継いで、その後どうするのか、決断するのはお前だ。だが、少なくともお前が成人するまでの間、私は儀式を続けさせてもらう。今儀式を止めれば、先ずお前が死ぬ。そんなことは私には耐えられないのだ。そうであるからには、これから、少なくとも十年ほどは犬達は死に続ける。そんな相手と、あまり関わって欲しくは無い。それはお前にとってあまりにも辛いことだろうと、考えるのだ」

父の話す内容はあまりにも衝撃的であった。僕は結局、父に対して

なんとも言えなかった。ただ、ハナが殺されることは、悲しいと思うばかりだった。それでもハナと会わないということだけは、僕の中に無いように思った。

その後、父は僕の行動を阻害するようなことはしなかった。僕は母の目を盗んではハナと遊んだ。そのことをシロは快く思っていないようだった。僕がハナや他の犬の子と遊ぶ様子を見るときの彼女の目が、なんだか悲しげに見えたのだ。それは父の言うように、いずれ僕の責任において殺さねばならない人と交流を持つことを案じているのだろうと思った。

けれどシロも僕の行動を積極的に邪魔しようとは考えていないようだった。僕はシロの悲しげな目を見るたびに悪いとは思いつつも、唯一の友人との交流を捨てることは出来なかった。ただ、僕がハナに言葉を教えることや、蔵書を貸すことに関しては、シロは目だけではなく、口に出して止めた。

「私たち犬には、学などありません」

このシロの言葉は、僕の胸中に堪らなく寂しく響いた。僕は彼女たちを犬だとは思っていなかったし、周囲からそう呼ばれることを哀れんでいた。そしてその哀れみの感情すら失礼なのではないかと考えるほど、彼女たちを人間としか感ぜられぬようになっていたのだ。シロにしるハナにしる僕よりも賢いように思った。それはシロの洞察力や、ハナの学習能力に見て取れた。シロは僕の態度で、考えていることを見破ってみせることがたびたびあった。

母の帰る時間だと知りつつも、もう少し遊んでいたいと思う僕の心を読んだかのように「今日はもうお帰りになられたほうが宜しいのではありませんか」と諭す場面があった。僕は水を指された気持ちで憤慨して見せたが、それ以上にシロの鋭さに驚いた。子どもの考えていることなど、観察すれば判るものなのかもしれないが、彼女がその必要を認めていて、それが主家との関係を壊さぬための配慮であることは、とてもではないが犬にはできぬことのように思われ

た。

結局、僕はシロの制止も構わず、ハナに言葉や文字を教えたし、蔵書も貸し出した。そうすることでそれまで以上にハナと会話が弾むことが喜びだった。咎めるシロに「僕が当主になる頃には、呪いを止める手段を探す。そうになったら君達は犬じゃないし、学だって必要じゃないか」と僕は言った。

何百年にも亘って続いた忌まわしい慣習を、止めようとした当主は幾人もいただろう。そしてそれが成功しなかったことを、今日の状態が示していた。けれども僕は可能性を信じて疑わなかった。あまりにも希望的な僕の言葉に、異論もあつたのだろうが、結局シロは何も言わなくなった。

それは、僕の言葉に彼女たちが確かに励まされたからだろうと信じたい。僕は何度も彼女たちを励まし続けた。あと何年かは頑張ってくれ、きつと解放してみせる。この言葉が確かに実現されるであろうことは、今日の僕の知るところである。

ハナと交流を持った翌年の年初、僕は母に呼び出された。そのころには既にハナと遊ぶことは僕の日課にまでなっていたから、母の目を警戒する一方で、心の中ではそれほどの危機感を保っていなかった。使用人に母からの呼び出しを告げられた時も、犬小屋に関することで呼び出されたとは全く考えてはいなかった。なにも母が僕を呼びつける用件は叱ることばかりではない。僕は、褒められることを常に期待できるほど樂觀的な性格ではなかったが、叱られる不安に怯え続けるほど母は厳しいばかりの人ではなかった。

そんな調子であつたから「最近、また犬小屋に近づいているようですね」という母の言葉は驚きでもって耳朵を打った。僕は親に叱られる子ども相応に、怯えながら、口の中でもごもごと言いつづけていたが、母はそんな僕の頬を強かに打ちつけた。母の怒りは、以前にもまして凄まじいものであつた。けれど僕は今回は怯えるばかり

りではなかった。僕は別のことを考えていた。僕が不安に思っていること、それが現実となったのかもしれない。

「ヒトガミの儀式が近いの？」母の小言を遮った僕のこの言葉は、それほど大きな声ではなかったが、母はそれを聞いた途端、驚いたような顔をして、黙り込んだ。僕はそんな母を尻目に、部屋を出た。

僕が向かった先は父の書斎であった。父は普段どうり座椅子に深く腰掛けて、本を読んでいた。昔から書斎における父の像はこうであった。けれどこのとき相對する僕の心は常と異なり波立っていた。「ヒトガミを造るんだね」という僕の言葉を聞いたとき、父は母と違って驚いた様子も無く、ゆっくりとした所作で本を閉じ、眼鏡を外して机の上に置いた。僕の目には父の態度が、このときばかりは不遜なものに映り、苛立った。そして父を糾弾した。

けれど父はそれに焦った様子も無く、先に告げたとおりだ、と言って、まっすぐに瞳で僕を見据えた。この目に射竦められたように、狼狽するのは僕のほうであった。確かに父は以前に、僕が成人するまで儀式をすることを告げていた。そのことを忘れていたわけではないが、なんとなく遠いことのように思っていたのは確かであった。そして、それに対して中止を申し出るだけの権利も、中止した場合の責任を負うだけの気概も僕には不足していた。父の眼は、ここに来て儀式のことを問いただして、その先どうするのかと問うているようであった。また、何も出来ない子どもが答えに詰まって往生する様を観察しているようでもあった。僕はこれに対して明確な反論をしたかったが、出来ぬ自分が腹立たしかった。父はこう言いたいのだ。

「彼らと交流を持ったとしても、結局こうなるのだ。だからお前も無駄なことはやめて、慣習に従え」

これは頭ごなしに叱りつける母よりも、むしろ効果的であった。僕は閉口するしかなかった。父は確かに僕の幸福を願ってこうしていることが伝わってきた。父の昔話を聞かされていたからかもしれない。

かった。父は先駆者として苦言を呈しているに他ならないのだ。

僕の口について出てきた言葉は、エゴイズムの産物に他ならない。けれど、僕には他に言うべきことがなかった。父の眼に見据えられて、僕に言えることはこれだけしかなかったのだ。

「ハナを、儀式に使わないで欲しい」

父はその答えを予期していたように、即答した。このことを了承したのである。これは驚きであった。父は、彼らに対して、公平で在り続ける人だと思っていた。そうでなければ、彼らの中から誰か一人を生贄に供することなどできぬだろうと僕は考えたのである。あくまで儀式を仕事と割り切って、規則だけを遵守することで冷徹になりきる人だと思っていた。けれど後続く父の言葉が、それを明快に否定した。

「私も、一度彼らと交流を持つてしまった人間だ。公平になどなりきれんのだ。お前の気持ち判りすぎるのだ。私は今日までシロを殺さずにきた。彼女は既に子を産めぬ身体なのだ。子を産めぬ女、そして男子は優先的に生贄に捧げねばならぬ。しかし私は、彼女だけは殺すことが出来んのだ。彼女が、劣悪な環境の中で病死していくのを望みこそせぬが諦観しているのが、当主である私の限界だ。私は彼女を救うことも出来ず、さりとて自らの手で殺すことも出来ぬ意気地なしなのだ。けれどこの行動ほど、傲慢なことは無い。殺さない人間を選ぶということは、殺す人間を選ぶ行為にすらなりうる。そんなことが私ひとりの決断で罷り通るなど許されることではない。大輔、私を軽蔑してくれ」

僕は、初めて父の本心に触れたような気がした。以前、この書齋で父の昔話を聞いたときでさえ察することが出来なかった父の苦悩が、僕の心に伝わるように思えた。

「法に殺されるんじゃなく、人に殺されることは、彼らには僅かな救じゃないかと僕は思う。少なくとも、彼らは明確に父さんを恨むことができるのだから」

僕の言葉は決して父を責めるものではなかった。父は僕に「ありがとう」というと肩を震わせて泣いた。僕もいつの間にか泣いていた。僕は今日、人を殺したのだ。ハナを殺さずにおこうとしたことで、誰かが身代わりになることもあるだろう。彼らは家に伝わる慣習や法で殺されるのではないのだ。明確な個人の意思でもって殺されたのだ。僕が父を慰めた言葉は、僕自身への言い訳でもあった。

僕はそれから、ハナに会いに行くことが出来なかった。母がそれを止めたというだけの理由ではなかった。僕はハナに顔向けできなかったのだ。ハナの、家族とも言える仲間が、僕の決断で殺されたも同然だった。ハナにとっては命の恩人かもしれなかったが、とてもではないがそれを誇示する気にはなれなかった。

僕は、殺す相手と交流を続けることなど出来なかった。一方でハナだけは殺したくは無いという気持ちだった。これはまるで父と同じことをしている。常に何かに責めさいなまれるこの感情を父と共有していることが、唯一の救いであるかのようにさえ思えた。

翌年の冬、父から「ハナがお前に会いたがっている」と聞かされたとき、僕はどきりとした。喜びの感情は全く無かったと断言できる。ハナが会いたがる理由を、肯定的に考える要素が、僕の中に存在していなかったのである。僕は一年間にわたり、ハナと交流を絶っていた。僕が会いにさえ行かなければ、ハナにはその自由が無いのだから、会わないことは簡単だった。

この一年間、自身の行動を恥じぬ日は無かった。僕の意味で彼らを殺す決断をしたことに加え、ハナに会わないことが逃げだという意識があった。年の功だけあって、父は逃げることも必要だと考えていたようだが、僕にはその柔軟さは無かった。僕には自分にとって都合が悪い交際相手との交流を絶つことは、即ち不戦敗だと考える若さゆえの負けん気があったのだ。しかし、それでさえ僕をハナの前に引き出す要因にはなりえなかった。僕はそれ以上に臆病だったのだ。

だからこのときハナの要求に応えたことは、僕の勇気を示すものではない。それだけ僕は未練がましくもあった。未練と臆病が僕の中で戦いを繰り広げ、今の今まで臆病さが勝っていたが、未練に、ハナの言葉に刺激された恥の感情が加勢し、それに押し勝った。ハナに望まれてなお面会を避けるほど、僕は恥知らずではなかった。僕は犬小屋に向かった。けれど心中は決して明るくは無かった。

犬小屋の中には、合板の板の節穴から隙間風が吹きつけ、外と比べて大差ないほどの寒さだった。一昨年の初夏の頃に、初めて訪れたときより閑散とした趣があった。この冬を乗り切るのに、毎年僅かの毛布だけで過ごさねばならないだろう。おそらく、体力の無いものから先に死んでいったはずだ。食料の供給が安定している彼らの数が、あまり増えていない理由がここにあった。この様子では、病気が蔓延しても隔離程度の処置しか施されなかったらう。それでも全滅の危機に瀕することが無かったのは、人間の生命力の強さを示していると思ふべきなのだろうか。僕は相変わらず暗い小屋の中で寝息を立てる彼らをまんじりともせずに眺めながら、どこか遠いことを考えていた。僕は何も言わずに、地面の上にどっかりと腰をおろして彼らが起きるのを待った。

そうしているうちに日も落ちて、節穴からの光さえ届かない時刻になったとき、漸く誰かが起き上がった。誰か、と言うのは、小屋の奥のほうは、暗闇になれた目でも確認することが出来なかったからである。その影は小屋の中央に近づくと、裸電球に手を伸ばした。そこで僕に気がついたようで、そのまま明かりをつけることなく、「大輔様ですか」と尋ねた。いくら目が慣れていても、顔まで判別するには相当近づかなければならないはずである。僕は疑問を彼女に投げかけた。

「シロ、なんで僕だって判ったの」

「私は鼻が効くのです。犬ですから」

僕はなんとも答えられなかった。以前のように明瞭に否定できな

つたのだ。それは僕が、彼らを犬と割り切るべきではないかという慣習に囚われ始めていたからである。気持ちとしては以前と変わりがなく彼らを人間と感じているのだが、あの夜、自身の決断で生贄の選別が行われたことが、僕の考えを変えつつあったのだ。それを鋭く感じ取ったのだろう。シロは「お父様と同じ判断をなされたのですね。そのほうが正しいように私は思います」と言った。僕はやはり言葉を返せずにいた。黙ったきりの僕にシロは続けた。

「当主様と奥方様が、先日、生贄の選別に犬小屋に来られました。その折、ハナの年齢は受胎の役を科すのに相応しくなったのではないかと奥方様がおっしゃられたのです。ハナには以前からこの役のことは教えておりましたので、ハナは大輔様に会いたいと、その場で申し出たので御座います。奥方様は大層お怒りになりましたが、大輔様がここにおられるということは、当主様が伝えてくださったのですね」ここまでを一気に言い切ると、少し間をおいて「この役に当たれば、四月からハナは村の方々と交わることになります」と付け足し、シロは僕の眼をじっと見た。僕は目をそらした。これはシロの眼を見据えることができぬほど臆病だったのではない。物理的に目を合わすことが出来なかったのだ。僕は袖に目を押し当てて泣いていた。

判っていたことだが、こうも真っ直ぐに事態を突きつけられ、悲しくなったのだ。僕にこれを止める権利があるだろうか。僕はどこまで彼らの運命を掌で操ることが出来るだろうか。僕がハナを特別に扱うということは、そういうことだった。

僕が落ち着きを取り戻す頃には、さらに幾人かが起きだしていた。その中にハナはいなかった。未だ眠っていたのだ。僕が「ハナを少し借りる」とシロに告げると、彼女は「必ずお返しくださいませ」と笑いながら言った。僕は眠っているハナを抱きかかえ小屋を出た。ハナは抱きかかえられたときの振動で半ば目を覚ましていたが、まだ寝ぼけたままで呆けていた。それでも寒風吹きすさぶ屋外に出た

ことで、寒さに完全に目覚めたようだった。

状況が判らぬまま僕を認識したであろうハナの「あ、大輔様。えつと、あの、お話が」という言葉を僕は遮って「蔵の中に行くから、話はそこで」と蔵の前でハナを降ろし、母屋に取って返した。蔵の鍵を持っていなかったのだ。僕が蔵の鍵と石油ストーブをぶら下げてハナの前に再び現れるのに五分とかからなかった。

僕は黙って蔵の鍵を開け、中に入ってストーブに火を入れた。灯油の香りには人を落着かせる作用でもあるというのだろうか、なぜか少し勢いを殺がれた心地がした。振り返るとハナは蔵の前で毛布を身体に巻きつけた格好でじっとしている。僕は黙ったまま彼女を蔵の中に引き入れると、扉を閉めた。

「あの大輔様」ハナが何か言いかけるのを、僕はまた遮った。「ああ、起きたばかりだったね。何か飲むかな」この言葉はハナへの気遣いというよりは、本題を話されることが未だ少し怖かったことによる。僕はハナが未だなんとも言わないうちから、蔵を出て、母屋に戻った。そこで薬缶に茶葉を直接放り込み、水をなみなみと注ぎ込むと、湯飲みを抱えて蔵に戻った。ハナは僕がさきほど蔵を出たときと同じところに同じ格好で突っ立っていた。僕は薬缶をストーブの上に置くと、蔵の中を漁りまわして来客用の座布団を見つけ、そのうちの二枚を床の上に直にひいた。そして土足のまま座布団に正座するとハナにも席をすすめた。

ハナは黙ったまま座布団の上に正座し、下を向いてじっとしている。僕は何を言えばいいのかわからずに、何かすることはないかと、この際、現実逃避にしかならぬことを考えていたが、考えてみても何も思い浮かばないので、何も言わずにストーブの火をみつめた。蔵の中は急に静かになったようであった。

向かいから鼻を吸る音がして、僕はハナのほうを見た。蔵の中は広がったし、ストーブをつけたとて、全体が暖まるとは思えない。風邪をひかせてはならないと思い、ストーブに寄るように言いかけた

とき、火に照らされた黒ずんだ床に水滴が落ちた。ハナが泣いていたのである。僕は慌てて何か言おうとしたが、言葉が出てこない。躊躇ううちにハナに先を越された。

「ごめんなさい、大輔様。私が呼びつけなどしたから、怒っておられるんですね」

「違う、違うんだ。謝らなければいけないのは、僕のほうだ。僕は自分の勝手な都合で、君と会うことを拒絶した。君が会いたいと言ってくれて、僕は君に恨み言を言われることに怯えた」とここまで言ったとき「恨み言など」とハナに遮られた。そのとき僕はまた口を閉ざした。僕が彼女に会うことが出来なかった理由を、ここで言ってしまうのかと考えていたのだ。もしかしたら既に彼女は知っているのかもしれない。けれど改めて自分の口から真実を吐露するのとで、いくらか気が楽になるような気もした。まだ何も話さないうちから彼女の目が、僕を責めているように感じられるのは、居心地が悪かった。いつそのことを責められるのか考えると心臓にも悪かった。そして真実を黙ったままであることで自分を卑怯者と責める別の自分が、心理のうちに存在することが苦しかった。彼女が真実を知っているのなら僕の行動は罪を重ね続けていると考えるのではないだろうか。

こんなことを長々と考えていたのだが、ふと僕が自分の都合しか考えていないことに気がついた。もしも僕が真実を話せばどうなるだろう。何も知らぬ彼女が真実を知ってしまったらどうなるのだろう。きっと彼女は自分だけが特別扱いを受けて生き続けることを苦に思っているのではないだろうか。あの優しい子が、あの初夏の日に、僕の微妙な心の動きから出た苦しみを察して、僕を撫でて、僕に微笑んでくれた彼女が、それをなんとも思わないはずが無い。そして、きっとハナは彼女を受胎の役から外す事でも同様に思い悩むはずである。僕は彼女をどうしたいのだろうか。物理的に苦しみから解くことだけで満足するのは僕のエゴイズムではないのか。

僕は無理矢理に笑顔を造って、彼女の頭を撫でた。彼女はそのことで余計に酷く泣き出してしまった。まったく、僕は何がしたいのだろう。この慣習から逃れられないのなら、彼女に酷い言葉を投げつけて、蔵から出てしまふのが一番いいのだ。割り切ってしまうえば、彼女は僕を恨みながらも強く生きるだろう。

ここまで考えて、僕には思い当たることがあった。僕ははじめから慣習を壊したかったのではなかったか。だから慣習など関係が無いとハナに会い続けていたのではなかったか。それが、生贄の儀式のことや彼女を殺さないことで随分と思ひ悩んでいるうちに、本来の目的など忘れ去っていることに漸く思い当たった。そうなのだ、この情報の氾濫している社会は、数十年前とは違う。僕はハナを救えるかもしれない。僕は自分でも気づかぬうちに奇声を発していた。ハナが驚いた顔でこちらをみつめている。僕は彼女の手を取った。そしてぶんぶんと上下に振り回しながら、半ば叫び気味で言葉を放ったが、後半で失速した。

「ハナ、わかったんだ。わかったよ。僕は君を救うよ。何年かかっても、きつと救う。だから待っていてよ。僕を、その、まだ信じてくれるのなら」

ハナは困ったような、笑ったような顔をして「はい」と応えた。そして言葉を接いだ。「ずっと待ちますから。何年でも待ちますから、ひとつお願いがあるのです」彼女の顔があまりに真剣なので、僕は振り回した手の動きを止めて彼女の次の言葉を待った。

「私は春から受胎の役を仰せつかりました。それが嫌だとか、免除してくれとか言って、大輔様を困らせるつもりは無いのです。寧ろ私だけ特別扱いされては困ります。ただ」彼女はここで言葉を区切った。そのまま俯いて何も言わない彼女の耳が、段々と赤く染まり始めた。そして遂に放たれた言葉に僕は狼狽することとなった。

「私を抱いていただきたいのです」

僕が口を開けたままの間抜け面で呆けていると、彼女は何か言い訳

でもするように口早に理由を捲くし立てた。「これで私を尻軽な女だと軽蔑して欲しくはないのです。私、言葉が上手くなったでしょう。シロに教えてもらったんです。大輔様の残してくださった本で、文字も覚えしました。それはいいんです、あまり関係が無いから。シロが他にも色々教えてくれて、受胎の役のことともそうですけど、男女のこととか、色々です。その、それでシロが、初めてのときは好きな人とするものだと言っていました。これは、人間だけなのでしょうけど、シロは、大輔様なら、きつと取り合ってくださいさるといつてました。それで私なんかでよければなのですが、あつ、品定めするのでしたね」

こう言つて、彼女は毛布を脱ぎ捨てて僕に近づいた。どうも、言葉にせよ行動にせよ、シロは極端なことを教え込んだのではないか。尻軽なんて言葉をどこで覚えたのだろう。それに品定めだの、僕は拒まないだの、シロの中での僕の像は随分歪んでいるのだろうか。このとき僕は考えた。しかし僕がシロを責めることなど出来ようが無かった。僕は一年ぶりの、女らしくなりつつある彼女の裸を見て、拒む意思など消し飛んでしまったお調子者なのだから。それに彼女を想う気持ちも定まったか怪しいくせに「僕も初めてだから、好きな人とがいい」などと余計なことを口走ったことは、今考えると恥ずかしいものがある。

けれど当時の僕を責めるのもナンセンスというものだ。情欲というもの覚え始めたばかりの小僧に、この提案を拒否することなど出切る訳が無い。僕はやはり、思春期の男子の心理を読みきつて、こんな行動をハナに教えたシロを責めるべきなのだと言張りたい。

僕は彼女を抱くと、唇を重ねた。知識の無い僕は「これでよかったのかな」と考えながら触れているだけのキスをしたが、ハナが覚えていることは、僕よりも進んだものらしく、彼女の舌は僕の唇を割って口内へと滑り込んできた。驚いて引つ込めた僕の舌と彼女の舌が口内でキスをしていた。これには参った。僕も、それにハナもこ

の感触が随分と気に入ったようで、かなり長い間、互いの口内を貪りあっていた。計ったわけではないが、数十分は続けただろう。口の周りがベタベタになり、それも端から乾き始めるころ、僕は彼女を引き剥がした。いつまでもキスだけ続けていても仕方が無いと僕の下半身が告げていたのだ。

彼女は僕と離れた途端、地面にへたり込んで荒い息をしている。僕はハナを、ストーブで暖まっている床に寝かせると、彼女の陰部をまさぐった。それが僕の知識よりも随分と濡れそぼっていたので驚いた。僕は陰茎を取り出すと彼女の陰部に押し当てたが、一体どこに入れば良いのか全く判らずに狼狽した。色々とずらしたり押したりしているうちに、僕のそれは頭だけ何かに包まれる感触を覚えた。だが、そこから先が進まない。無理矢理に押し入れようとすれば、ハナは何かをこらえるような顔をするし、僕自身、狭すぎて心地よさを感じなかったのだ。ハナの「もう一思いにやってしまってください」という、今思えば可笑しな言葉で、僕は漸く覚悟を決めて、思い切り突き上げた途端、わけもわからぬまま果ててしまった。半ば混乱状態のまま、僕らの行為は終わった。彼女は随分上機嫌で冗談めかして「子どもが出来たらどうします」などと言うので「出来てもその子は辛い運命にはならないよ」と言った。けれど、男児が生まれれば直ぐに儀式の生贄になることが判っていたから、それだけは嫌だな、と考えていた。

僕は勝手に嫌な想像をしていたが、彼女が「名前をつけてください」と幸せな夢を語るので、「ハナの子どもだから、花はつけな」と言って真剣に考え出した。そして「未だ君の知らない世界、音楽なんかも聴けるようになればいいね。音楽は文化の象徴だから」と格好をつけた。僕はあえて男児が生まれる可能性を否定するように、生まれるかどうかわからぬ我が子に「花音」と名づけた。

僕はそれから勉強ばかりしていた。

あの日、蔵から帰った僕は、父に私立中学への進学を申し出た。そ

の学校は大きな街にあり、この村からは随分離れていた。僕が村を離れ進学することを希望したのは、ハナから離れたかったからではない。僕は彼女を解放する手段を模索したかったのだ。この村にいたのでは、得られる知識も限られている。僕の申し出を、父は快諾した。僕を犬小屋から引き離れたかったのだろう。意外なことは、母の反対であつた。けれど、次の日には父に説得されたとみえて、納得したようであつた。

僕はハナにこれらの決断を逐一報告していた。彼女は反対する代わりに、僕の身体を求めた。それは殆ど毎日であつた。回数を重ねれば、慣れてきたと見えて、僕もハナも行為に満足していたから、その点は良かった。だが勉強の片手間に、彼女と毎日交わるので、僕はやけに多忙な日々を送っていた。

受験に合格し、旅立つことになったとき、僕は少し寂しかったが、彼女が「信じていますから」と言うので、僕だけが湿っぽいことを言うことは出来なかつた。

僕は彼女との約束を果たしたのだ。あと数ヶ月で僕は彼女の待つ郷里の地を踏むことになる。彼女の声や仕草や体つきや顔の造りはどうなっているだろう。随分変わっているだろうか。辛い毎日に耐えているのだろう。けれどそれももう直ぐ終わるのだ。僕は彼女を解放する術を手に行っている。彼女の喜ぶ顔が目に見え、僕までにやけてしまった。

幸せな夢の続きは、この世界に真実、存在している。

主家編 2

今は冬だというのに、こんなにも暖かい。きっと私のために一足早く春が来たのだ、と少し嬉しくなった。こんな気持ちになれたのは、随分久しぶりのような気がする。もっと暖かくなれば、あの子も帰ってきてくれるだろうか。あの子が帰ってくるのは×年の春だと夫は言った。それは今年ではなかったか。ならばもっともっと暖かくなればいいのに。暑いくらいに、燃え盛ればいいのに。そんな私の考えを否定するように、急に冷たい風が吹き抜ける。その中には鉄の臭いと何かが焦げる臭いが入り混じっていて、私は急に不快になった。それに皮膚の濡れた部分が熱を奪うようで、冷たく感じる。私はその部分を袖口で拭う。ぬるりと嫌な感触が皮膚に伝わった。そしてさっきまでの鉄の臭いは何であったのか、漸く判じた。

私が河野家に嫁いだのは未だ二十歳の時だった。当時、短大を卒業したばかりだった私が「もっとモラトリウムに浸っていたかったのに」と言うと、両親は「河野様の家に嫁げるんだ。これ以上の幸せは無いんだよ」と諭した。河野家は、私の家とは遠い親戚に当たるけれど家格は河野家のほうが随分と上で、私の家のように河野家を主家と仰ぐ家は多かった。私は何も河野家に嫁ぐのが嫌だったわけではない。私が不満だった理由らしい理由は、先の私のぼやきぐらいなものだ。

河野家の現在の当主である伸輔様は、数年前まで毎年行っていた河野家の年始の挨拶で、何度も顔を合わせていた。彼はいつも優しいがな笑みを絶やさなかった。穏やかな性格の男性のように見えた。伸輔様は私よりも二十も年齢が離れていて、最後に会ったのは、私が大きな街にある私立高校へ進学する十五の歳の正月のことで、そのとき既に三十も半ばだった筈だが、不思議と老けた印象は無く、年

上のお兄さんと言う風にしか考えていなかった。

彼は私をフミちゃんと呼んだ。私の名前が文子だったからだ。私と同じ歳の、学級の男子たちは、私の名前をからかって呼んだ。「ぶんこ、うんこ。うんこフミコ」といつて囃し立てるのだ。私は男子が嫌いだった。けれど伸輔様は、同い年の男の子達とは随分違っていた。からかうどころか良い名前だと褒めてくれさえした。彼の落ち着きのある声で、そう言われると妙に嬉しくなったものだ。

同じ齡が離れていても河野家の前当主であつた義父を私は嫌っていた。伸輔様とは違って、両親や私に威張り散らしていた。父が差し出した贈り物の包み紙を、目の前で破つて、中身を見た後女中に下げさせたこともあつた。そんな扱いを受けても、媚びへつらっている父を見るのがまた悔しかった。

こんな家に嫁ぐことなど願ひ下げだと思つていた私の心を変えさせたのは、前当主の死と伸輔様の当主就任だった。このときの私は当主になった伸輔様を見たことが無かつた。私が、高校を出て短大の寮で暮らしていて、年末年始もお盆にも里帰りしなかつた親不孝者だったからである。けれど母は寮にまで電話をかけてきて、伸輔様を褒めちぎつた。なんと伸輔様は、もう十年も前になる「贈り物事件」を覚えていて、しかもそのことを父に謝つたというのである。

通夜の席で「あの時は嫌な思いをさせて申し訳御座いませんでした。父はあのとおり子どもっぽいところのある人でした。私から詫びさせていただきますので、どうか心から父の冥福を祈つてやってください」と満座の中で詫びたのだ。この件は未だに親戚中で語り草になっている。私はこの話を聞いて「優しい伸輔様らしい話だ」と知つた風な感想を抱いた。

私の婚約の話が決まつたのが、その一年後だった。

伸輔様はもう四十にもなるというのに独り身で、当然子どももいなかった。そのことを、建前上は憂慮し、本音では付け込んだ親戚の連中が、見合いの話を次々と持ち込んでいたのだ。私の父も機に乗じたひとりだった。伸輔様は義父が存命だった頃から、これらの話

を断り続けていた。「少なくとも父が存命のうちは」というのが決まり文句だった。その理由は後に知るところとなる。

私は父が勝手に縁談を申し込んでいたのを知っていた。はじめにその話を父から聞いたのは義父も未だ生きていた頃だったので「たとえ河野家が了承しても私は嫁になんか行かない」と突っぱねていたけれど伸輔様が当主になったことで、断る理由がなくなってしまった。つい「じゃあ伸輔様が了承したなら」と父に言ってしまったのがいけなかった。まさか数ある親戚の独身女性のうちから私が選ばれるとは思っていなかったのだ。結婚と恋愛は違々と判っているし、別にそんなことでごねていたわけではないが、伸輔様に対しての私の想いは「断る理由も無いが喜ぶ理由もない」程度のものだったから、婚約が成立したと父から聞かされたときも、華の独身生活への別れを惜しむ気持ちだった。

こうして私は河野家へと嫁入りした。

結婚に関する行事の最中は、何かとばたばたとしていて伸輔様とじっくり話をすることも出来なかった。私の判断する限りにおいては、これまで受けていた彼の印象と変わるところは無かったから、彼との結婚を不安には思わなかった。私が漸く伸輔様とゆっくり話す機会を持てたのは、新婚旅行の一夜目のことであつた。

旅行は国内の温泉宿だった。結納の席で、式に関することや披露宴のことなど色々なことを決める話し合いがなされた中のひとつに、この新婚旅行のことがあつた。伸輔様は既に両親を亡くしていたので、私の両親が提案して、伸輔様と私がそれを了承する形で様々なことが決まった。私は式のことなど特に興味も無かったし、伸輔様は特に何かに反対するようなことは言わなかった。ので、万事、恙無く決まっていくなかで、唯一私が反対したのが新婚旅行の行き先である。父は何も主張が無かったとみえて、この件には口を出さなかったが、母が強硬に海外を推したのだ。

私は旅行と言うものが大概に嫌いであつた。金を払って疲れに行く

など馬鹿馬鹿しいとしか言いようが無いとまで思っていた。海外などに行ったりした日には、観光名所を巡りまくり、何日も宿を転々としたり、海やらプールやらで泳ぎまわったりしなければならいだろう。たとえ海外に行つたとしても、無理に観光プランやバカンスのパンフレットの内容を遵守しなければならいということは無いのだが、わざわざ海外に行つてまで、日がな一日宿で本を読みふけったり、外を眺めて呆けたりするのも不自然に思われるし、そんなことなら国内でも十分ではないか。本当の休養と言うのは、身体を休めることを言うのだ。旅行に行くなら国内が良いと私は反対した。母は中々引き下がらなかったで私は伸輔様に意見を求めた。けれど伸輔様は「彼女がこういうなら、私に反対する理由などありません」という消極的な意見しか言わなかったで、やはり母は引き下がらなかった。私も段々意地になつてきて「海外に行くぐらいなら、婚約を解消する」とまで言つたので、慌てて母は了承した。母は私が言い出したら本当に実行することを知っていたのだ。なにせ私は、河野家の年始の挨拶に行きたくないがために、家出同然で遠くの街の高校に進学し、五年も里帰りしなかった娘であつた。

結局、同じ湯治場で一週間ばかり滞在する、大層地味な旅行になつて、私は満足だった。旅行先の宿はこの土地では一等立派な建物で、かといつてコンクリートで上に上にと積み上げた不恰好なものでもなかった。木造の一階建ての平屋で、やたらに大きな、観覧料でも取れそうな立派な庭があつた。部屋に着いた私は、中居が淹れたお茶を飲み干すと、さつき通りかかった廊下から見える池に鯉が泳いでいたのを思い出して、そわそわと気が落ち着かなかつた。

「池の鯉が気になるのかい」と伸輔様に言われたときは、この人は心が読めるのかと思つた。するとそれが顔に出ていたらしく「池の横を通りかかった途端、歩みが遅くなつただろう」と言つた。私は照れ笑いすると「見に行きませんか」と提案した。彼は可笑しそうな顔をして「早くしないと鯉が逃げるかもしれないからなあ」と私

をからかった。

彼は池の鯉を眺めながら「そういえば、フミちゃんは鯉が好きだったね」と言った。その言葉に違和感を感じて少し考えてみた。その答えは実に簡単なものだった。再開してからこう呼ばれたのは初めてだったのだ。何年も前の、年に一度しか会わないような女の子のことを覚えていてくれたので、私は素直に感心した。「河野の家の池にもいましたよね」と応じると「ああ、これからは毎日だって見られる」と返ってきたので、急に河野家に嫁いだことを実感した。結婚前は、まだ想像もつかないことだったし、式の最中なんかはそれほどではなかったとはいえ、河野家と何も関係が無い温泉宿で、漸くそんな気持ちになれたことが意外だった。こうして私は数年ぶりに伸輔様と打ち解けることに成功した。そうしてみても彼はやはり当時と何も変わっていないのではないかと思われた。

未だ夜の九時を少し過ぎたばかりだというのに、私は部屋に敷かれた布団に潜り込んだ。普段ならば、年齢相応に零時前後にならなければ眠くはならないのだが、この日は夕飯を済ませたあたりから眠たくて仕方が無かった。それは深層心理とかいう、無意識下のこともかもしれないが、今までは不安で仕方が無かった結婚に関する顛末が、今日伸輔様と話したことで安心に転じたからかもしれない。けれども私は眠ることを許されなかった。伸輔様が「話したいことがあるから、寝るのは少し待って欲しい」とやけに不安げな顔で言ったのだ。「君に謝らなければならぬことがある。軽蔑してくれても良い。これは私自身の心の重荷を下ろすための、エゴイズムに裏打ちされた行動なのかもしれないが、それでも何も言わずに騙し続けることは出来ない。それは、今から話すことの次第を聞けば、理解してくれると信じていたい」

「私は結婚するつもりなど無かったのだ」という彼の言葉を聞いても、私は驚かなかった。彼が、生家の義務のためだけに結婚したこ

とは明らかだった。あれだけの縁談攻勢を避け続けるのには、それなりの決意というものがある。「私に心底惚れぬいていて、学生でなくなるのを待っていた」などという妄想を抱けるほど、私は楽天家ではなかった。

おそらく彼が本来語りたいことは、その理由だろうと、私はなんとなく見抜いていた。黙ったままの私の眼をじっと見据えて、彼はゆっくりと語り始めた。彼が一时间近くかけて語った河野家に伝わる慣習の事実は、私に驚きと怖気を感じさせるものだった。弟を呪いで死なせてしまった後ろ暗い過去、犬の一族に対する想い。それらを語るときの彼の瞳は、体躯に似合わず儚げで、悲しそうだった。そしてそれらの事実を「河野家と血縁のある家、もちろん君の家の人も、知らない。すべてあの村の中だけで完結している、恐ろしい因習なのだフミちゃんを選んだのも、偶然だ。見合い写真を、誰のものと判らぬようにして、適当に選び出したそれが君のものだったというだけなんだ。本当にすまないことをしたと思っている」と言った。

「私は出来れば結婚などしなくなかった。このおぞましい呪いに、関わる人間を増やしたくは無かったし、私の子どもには、こんな責任を負わせたくなかった」

「けれど、誰かが続けなければ、たくさんの人が死ぬのでしょう」という私の質問に、彼は頷いた。彼はわずかばかりの抵抗のために結婚することを遅らせたかったのだろう。けれど、いつかは子孫を残さざるをえない。彼の苦悩を知って、私は何もいえなかった。部屋の中は急に静かになったようだった。

旅行から帰ってのち、私達夫婦の関係は急に遠いものになったようだった。それは、伸輔様と会うことの無かった数年間よりも、ずっと遠い距離のようにも思えた。私は、儀式を続ける彼を軽蔑したわけではなかった。伸輔様自身が誰よりも思い悩んでいたであろうことは、あの夜語られたことの中からはつきりと感じ取っていた。

けれど、同時に彼に対して、わたしは一線を引くような気持ちが出来上がってしまった。私達は夫婦であつて、夫婦ではないのだとさえ思っていた。結局のところ、私は儀式を頭の中では理解していても、実際にどういふものなのか判っていなかったのだ。伸輔様のことを未知の者として、遠い存在として認識しようとしていたのは、私自身が儀式に深く関わらなければならぬことまで理解していなかったからに過ぎない。

けれどそれを理解することは、この家の人間として、避けることの出来ない運命だった。

伸輔様が重苦しい表情で食事を取り、まだ食事の終わらぬ私に「済んだら書斎へ来て欲しい」と言つたのは、今年も幾日か残すのみとなった冬の日のことだった。彼はそのまま部屋を出て行つた。私は彼の表情から、用件があつた儀式に關することだと察していた。私は全て食べ終わらぬうちから席を立て、彼の書斎へと向かつた。

藤を編みこんで作られた座椅子に深々と腰をおろし、窓の外を眺める伸輔様の表情は、こちらからは窺うことができなかった。私は書斎の扉の前で、しばらくじつとしていたが、彼が私の入室に気づいていないのだと判ると「あの、ご用件は」と事務的な口調で言つた。その言葉が私達夫婦の仲を象徴するかのように思えて、一抹の寂しさを感じ、それを紛らわす言葉を搜したが、結局彼が口を開く方が早かつた。

「明日、ヒトガミの選別をする。何も用意はいらないが、夕刻までに書斎に来てくれ」

彼の言葉は、私の事務口調に復讐するかのように、やけに平坦に響いた。そこには何の感情も含まれていないようにも思えたが、そのときの私は食卓での彼の表情を思い浮かべ、あえて感情を殺しているのだらうと考えた。

その日はやけに寒かつた。屋内にいてさえ、底冷えを感じるほどで

あったが、それはこの空間に一切の暖房器具が取り入れられていないことも、その一因であった。犬小屋の中は閑散としていた。家具も食器も、衣服すらなく、なにひとつ文化的なものを感じさせなかったのだ。それだけで犬と呼ばれた人間たちの生活の全てを察することが出来るようだった。

伸輔様は小屋の中を一瞥すると、名簿に目を通し、彼らに整列するように命じた。その中で最も年長だろうと判じられる女性が、他の人々を促し、そろそろと億劫そうな仕草で、彼らは私の前に整列した。すると伸輔様は犬の名前を一人ずつ誰何していくのだ。それが全て済むと、少し控えた位置に立っている私の方に向き直って、私に名簿を手渡した。私は受け取った手が震えているのを自覚した。この異様な雰囲気飲まれてしまっているのだ、と頭のどこか冷静な部分が告げている。ふと肩に何か触れるような感覚を覚え、自らの肩を顧みるとそこには伸輔様の手が載っていた。掌から腕、首、顎と目線を登らせていくと、彼の眼と私の眼が、互いに目線を放って触れ合った。そこに形容しがたい感情が凝縮されているような気がした。彼の眼は、私以上に濃厚な何かを訴えていて、私の感情と彼のそれが、そこで混じり合って私達は何かを共有したようだった。私はそれを恐れるように視線を外したが、既に遅かった。私にとって、ヒトガミの儀式は未知の存在ではなくなつたいたのだ。私達が共有したものの正体は彼らに対する責任だった。

名簿には犬の名と年齢と性別と、受胎可能であるか否かが記載されていた。伸輔様はシロという犬にあれこれと下問をしていた。主な内容は受胎可能な犬の確認のようだった。それらの犬の中から受胎不可能なものは生贄に供するのだろう。可能な者の中から受胎の儀式に出す者の選別は、妻である私が果たすべき義務だった。年齢や身体の衰弱具合によつては、妊娠が死につながることも少なくない。また、病気を持っているかどうかなども重要な要素だった。私はそれらを考慮し、一年間に二人ずつ受胎の役を担うものを選び出すの

だ。この義務は、それほど苦ではなかった。まるで女郎屋のやり手婆にでもなったような気持ちだったが、それでも相手を殺さないというだけ、気が楽だった。問題は、その後の生贄の選別だ。私が義務を履行したことを確認すると、伸輔様は私の手から名簿を取り、なにか考え込むような仕草を見せた。

伸輔様は僅か五歳の幼児を選び、私に同意を促した。幼児は男児であつた。未だ受け入れたばかりの義務に、そして幼児を殺すことを決断しなければならないことに、私は怯えていた。けれど、もはや逃れられぬ運命であることを心のどこかで認めてしまつてもいた。あとは時間が心の負担を取り除くのを待つばかりなのだろう。戸惑う私の心の動きを、何よりも目が表していた。私の目は名簿の上を彷徨つた。その末に、書類上にひとつの救いを見出した。それを確認するように、私は伸輔様に進言する。

「このシロというのは、受胎不可と書いてありますが」

「ああ、それは、いいんだ」

「けれど、年齢の若い者から殺すことはないでしょう」

「年齢如何に関わらず、男児を生かす意味がない」

「けれど、受胎できないのならば、やはり生かす意味はないのでは
ありませんか」

私はその言葉の残酷さに気がついて、この事態に順応している自分を恐ろしく感じた。伸輔様はどこか悲しそうな目をして、私を見ていた。そして、しばらく沈黙を守っていたが、ふいに「彼女には知識があるから、一族の代表として、他の犬を管理してもらっているのだ」と告げた。

私にとって、その男児はあまりにも哀れな存在だった。彼が生贄に供され、弱り果てて死んでゆくのを、ただ漫然と見ていることしか出来ないという事実は私を責めさいなんだ。私は、せめて儀式までの僅かな間でも、彼に人間らしい生を与えてやりたいと考え、そのことを伸輔様に進言した。伸輔様はそのことをあまり良くは思つて

いなかったようだが「せめて最後だけでも、か。情を抱くなというほうが無理だろう。けれどそれで辛くなるのは君なのだ。しかし、女性と男性では、感情の処理の仕方が違うのかもしれないな。それで君が満足するのなら」と消極的に認めてくれた。

男の子はクロという名前だった。私は彼に与えるだけの愛情を全て注いだ。彼はその日から私の息子となった。まだいくとも言葉が話せない幼児であるが故に、彼をわが子として受け入れることはそれほど難くなかった。それは伸輔様の言うように私にとっては途方も無く残酷なことだったが、この際、私は自身の不幸よりもクロの被る筈の不幸に、より多くの考えを巡らしていた。女性らしい愚かしさと人は笑うだろうが、感情よりも優先すべきこととは何なのだろう。理に疎い私には判らなかった。けれど、情に拠って行った私の行為が、自身を蝕んでいくことだけは、はつきりと自覚してもいた。

クロは私に全てを求める。私は彼に全てを与える。食事も排泄も入浴も、同じ布団で眠ることも、夜毎枕元で語る御伽噺も、何もかもを私が与えた。クロはそれを素直に受け取った。何の疑いも抱かなかった。それこそが、クロが私に対して示す信頼こそが私を責めた。彼が私に何かを要求し、甘えた表情を見せる。与えられたときは、礼すら言わずに、それで悪びれもせず笑ってみせる。そこにあるのは全く親子の日常に違いではないか。けれど、一体どこを捜せばいるというのだろう。わが子の信頼に対して、死をもって報いる親などが。何もかもが欺瞞なのだ。誰を欺くのではなく、自身を欺くための行為なのだ。私はこんなにも辛い感情を抱えて、それでもこの子に尽くしている。だから私のために死んでくれないか。それが私の行為の意味であった。

私に残されたのは悔恨の念のみだった。

クロの死の際にたったの言葉がそれを象徴した。彼は事切れる直前、ただ私の眼をみつめていた。

そして誰にも聞こえないような小さな音で呟く。

「おかあさん」

私はその年の生贄に供された男児を、まるで生まれ変わらせたがごとく子を孕んだ。

日ごと大きくなっていくお腹を見ながら、子を孕んだ感慨も、この子への責任も、伸輔様の気遣いに対する嬉しさも、なにひとつ現実感がなかった。わが子を死なせて、死んでいく様子を、ただじっと見ていただけの、そんな女が再び母となる資格などあるのだろうか。これは疑問などではない。そんなものは、ありはしないのだ。けれど胎内に宿った命を、殺さずに済む命を、消し去る勇気もまた、ありはしなかった。

子どもが生まれるまでの全ての過程が受動的に過ぎていった。それでも、子どもは生まれた。その赤子が助産婦の手に抱き上げられ、産声を上げたとき、私は泣いた。ようやくこのときになって子どもが生まれたことに現実味が増えられた気がした。泣いている私を見て、いったいどうしたことかと医師や看護師達がうろたえている。あなたたちには、わからないだろう。私は思った。私が味わってきた苦しみを、この子も味わうことになるだろう。これは確かに呪いだ。私達は自らの死を防いだようで、そのじつ殺され続けている。この子には生まれたときから、平和など約束されていない。幸福も約束されてはいない。苦しむためだけに生まれてきた子どもなのだ。それでも、この子を見て、護りたいと思った。都合のいい話だ。自分が生きるために血のつながらないわが子を殺して、血のつながったこの子を護りたいなど。けれど私の幸福の全てを投げ出して、心も身体も、全てを呪いの前に投げ出しても、この子だけは護りたいと思ったのだ。母の愛などという美辞麗句で誤魔化すつもりはない。これはただのエゴイズムなのだ。私は神様に最後のお願いをした。「どうか私だけを地獄におとしてください」

私はこの子に母の愛を全て与えたかった。幸福な生活のみを与えた

かった。他の子供たちと同じように、両親の愛を受けて育ち、何の不安もなく大人になって欲しかった。そしてその果てにあるのは、儀式の遂行などと言う呪わしい日々ではなく、不自由も苦悩もない、限らない幸福でなくともいい、普通の日々であって欲しかったのだ。大輔の人生にとって、不都合であろう呪いの儀式は、消し去る覚悟が私の中にこの時点で出来上がっていた。それが為に私はどれだけの人間を殺すことになるのだろうか。

呪いを断ち切るのであれば、私ひとり、進んで死ねばいい。儀式に自らの命を供すればいいのだ。私は誰も恨みはしない。河野の家や、あの子に災いを成すつもりなど毛頭ない。けれど私は死なない。私は殺す。あの子にとって母が必要であると信じて。クロが最後に母を求めたように、人には母が必要であると私は思う。クロが求めて与えられなかったその先さえも、私は大輔に与える。

私は伸輔様が亡くなるまでの間、犬小屋にまつわる全てを大輔には伝えないでおこうと考えていた。そのことを伸輔様に告げもした。彼は私が尤もらしい理屈を述べ立てる間、ひとつひとつの言葉に納得したように頷いていた。情操教育の観点や、人生の、少なくとも父が死ぬまでの僅かな間、幸福に過ごせるよう、わが子への愛を示す母らしい配慮。もっともらしい言葉で糊塗した真実。私の考えにはその先がある。大輔は、きつと呪いの儀式を知ることなく一生を終えるだろう。私が終わらせるのだ。

年齢を考えれば、伸輔様は私よりも先に生を終えるだろう。それまでの間、大輔に対しては母の顔のみを見せる一方で私は何事も無かったかのように犬を屠殺し続ける。そして伸輔様の死後、大輔の知らぬ場所で、私は最後の生贄となって生を終える。大輔は何も知らずとも良い。河野の家を継ぐことさえ考えなくとも良い。むしろそのほうが好都合でありさえする。どこか遠い街で、平凡な人生を送って欲しい。

年に幾度かの里帰りを、私は心待ちにする一方で、なんとしてもこ

の家の秘密を守ろうとする。そうしてばたばたと過ぎ行く日々の中で、伸輔様は老いて死に、犬たちは秘密裏に解放され、私は大輔への愛ゆえに、ひっそりとその生涯を終える。大輔は私の死を手紙で知り、すっかり骨だけになってしまった、白木の箱に詰められた私と対面するのだ。

私はこれからの人生を想い、それが大輔の為にしてやれる至高の行いだと自身に言い聞かせた。

大輔はクロとは似ても似つかぬ子であった。それはどちらも尊重しうる人格ではなく、片方は否定されるべきものであった。そして否定されるべき人格を有しているのは大輔だった。彼はクロとは正反對ともいえる人格を内包していた。大輔は偽ることを不義とは感じない性質だった。私はけして潔癖なわけではなく、人間が嘘や偽りを内包することを悪と断じようとは思わない。不義ではあるだろうが、悪であるとは限らないと考えている。一方で、自らの不義を自覚しないことは悪であると思うのだ。

大輔は言う。僕は嘘を吐いていない。その言葉は、大輔の中で逡巡するいとまもなく、彼の喉を震わせる。罪悪感が無い。それゆえに迷いが無い。そして考えすらない。自身の利益と不利益とを天秤にかけることをしない。嘘と誠が同じだけの量、吐き出される。大輔の中にある言葉達は、彼にとって嘘も誠も全て等しいのだろうか。大輔にとって誠などあるのだろうか。自身すら偽っているのではないか。どうでもいいような嘘を護るために、身を投げ出す。自身の信頼を護るための、大事な真実を否定する。彼にとって価値ある言葉など無い。何も無い。何も無い。私は大輔をみるたび不安になった。私が彼に対して、真実を隠し続け、嘘をつき続けていることを責められているような気がした。

大輔が十歳のとき、彼は犬小屋に近づいた。きっかけはなんだか判らない。女中の話では、大輔は犬の子をひとり、母屋の中に招いた

ということだ。そして、その子犬を血まみれになるまで殴った。

私が大輔を部屋に呼びつけたとき、彼は泣いていた。付き添ってきた女中は「ずっとこうなんです。私が風呂場でお見かけしましたときから」と言った。私の頭の中にはいろいろなことがグルグルと回っていて、勢いよく回る言葉の群れの中からひとつ掴んでは、彼を怒鳴りつけた。そのために、叱る内容は一々変わってしまい、全体を見ると支離滅裂な説教だったような気がする。小屋に近づいたこと。家に犬を連れ込んだこと。暴力をふるったこと。そして嘘を吐いたことを叱った。これらは全て無駄なのだ。彼の中で、言葉にしたものは何の意味も無い。価値も無い。彼がそれを解らなければ、説教など無意味だ。嘘についてはいけないなんて無意味だ。彼には通じない。私が彼に真実を偽っているからなのか。私が真実を告げれば、彼は変わるだろうか。言葉に意味が宿るだろうか。けれど、それは出来ない。大輔には何も知らせてはいけない。それが彼を護るということなのだ。

「ごめんなさい」

大輔がそう言ったときも、この言葉には意味が無いのだろうと思った。彼が持つ全ての語彙の中から、この状況で無難なものを、無作為に選び出ただけだろうと思った。いつもそうだ。大輔との会話は、成立しているようで、していない。

「解ってないくせに、謝らないでよ」

私は冷たく言い放った。どうせ通じない。理解しない。

「解るよ、解るんだ」

「何が解るのよ」

「暴力をふるってはいけないんだよね。自分が傷つけられたとき、何もいえないから。暴力を使う人には、暴力を無条件に受ける覚悟がいる」

私はどきりとした。これだけ成立しているかのように聞こえる会話は、殆ど無い。稀なことではあるけれど、私の言うことを、ただ反芻しているだけだろう、そう思った。

「それに、小屋に近づいてはいけない。けど、これは意味が解らない。不衛生だなんて、理由になっていかないよ。衛生的にすればそれでいいんじゃないの？僕は犬という言葉が無条件に受け入れてきたけれど、お母さんの言う、犬ってなんなの？」

「あなた、いったいなんで」

私は狼狽した。これは、いったいなんだ。なんなのだ。大輔は言葉が何なのか、理解している。一体何があったのか判らない。けれど、おそらく確実なことだ。そして、それゆえに「犬」という言葉の持つ意味に疑問を持ち始めている。

「嘘を吐いてはいけない。母さんが一番よく言う言葉だ。今日も言った。さっき言った。僕は解ったんだ。だから、今日までは全てを偽りの中に捨てるよ。明日からは、何もかもに意味があるんだ」

次の日、大輔は全ての真実を糊塗していた。犬の子に暴力を振るったこと、私の小言の内容。いつもと違う、整合性の取れる嘘で塗り固めていた。そして、やはり彼は言葉の持つ意味を理解していた。伸輔様は喜んでいたが、私は素直に喜べなかった。伸輔様は、いつか大輔に真実を話してしまうつもりなのだ。けれど私にはそんなつもりはない。私には今の犬を祝福することが出来ない。

その犬の子は、大輔になんて言ったのだろう。言葉の通じない大輔に。二人の間に何があったのだろう。漠然とした不安があった。私は使用人に、大輔が小屋に近づかぬよう、さりげなく見ておいて欲しいと頼んだ。

何週間か後、私は伸輔様に呼び出された。

そこで「犬小屋の件をすっかり話してしまった」と告げられ、目の前が暗くなった。何故。この人は、こんなにも簡単に。いずれ話すつもりであっても、大輔はまだ十歳だ。早すぎる。私は伸輔様をなじった。そして手当たり次第に、そこらへんにあった物を投げつけた。大輔の幸福が、全て終わった。何もかも終わってしまった。

「あの子は、昔の私だ」

だからだ。だから違う結末を与えてやろうと、私が腐心したというのに。貴方はすべてを諦めている。死ぬ覚悟も無いくせに。

「死ぬ覚悟？」

そうだ、貴方は自分が犠牲になつて全てを終わらせる覚悟など無いのだ。所詮は、自分が可愛いのだ。私は今までに私が抱え続けていた想いの全てを伸輔様に投げつけていた。伸輔様はそれらの言葉に驚いたような顔をして、それから苦い顔へと表情を変化させた。

「すまない。なにか言えば、それが全て言い訳になる。けれど、君に辛い思いをさせていたことに、気づいていなかった。本当にすまなかった」伸輔様は私を抱いて謝った。ああ、胸糞が悪い。この男、シンスケサマ？シンスケ。糞の様な男だ。こんな男に、触れられているだけでも気持ちが悪い。せめて大輔に殺させないために、この男を生かそう。この男が死んだあと、私は生贄になろう。大輔は悲しむだろうし、責任を感じるかもしれないが、それでも大輔自身が殺人を経験せねばならないよりは、余程良い。あの犬の子といい、シンスケといい、邪魔ばかりする。殺してやりたいほどだ。

ああ、可愛い大輔。あなたを悲しませはしない。必ず私が呪いを止める。あの役立たずのクズに代わって。

その後も大輔が犬小屋に近づいていることは知っていた。けれど、あえてそれを止める気はおきなかった。大輔はひとつの不幸を背負った。見知った人間が自分の元を否応無く去っていく喪失感。それが自分が生きるために失われる身代わりだということに対する罪悪感。

この世界は椅子取りゲームのようなものだ、と誰かが言った。幸福になれる人間は限られていて、その席を奪い合っているのだという。そうかもしれない。けれど、それを自覚せずに生きていくことも出来るのだ。この国では、殆どの人間がそうして生きている。もちろん、国外の人間もそう。その日暮しを続ける外国の貧農の人々から、

蓄えを奪って生きている。金という武器をちらつかせて。しかし、それだけじゃない。近くても見えない、いや見ないようにしている。この国のいたるところにも、椅子からあぶれた、はじめから椅子なんて届かないところにいる人が存在する。幸福な私達は、それらの不幸から鈍感である術を知っている。近づかないように、見ないように、聴かないようにする。聞こえてはいても聴こえてはいない。見てはいても視てはいない。遠くから、他人事のそれを、悲しむふりをして無視している。

大輔は、もう無視することはできない。目の前に突きつけられた。瞼をこじ開けられて、眼球から僅か3センチメートルのところに。それでも見るな、なんて、私には言えない。私に言えるのは、それを見て、それでも自分の幸福を享受して欲しいということだけだ。自分が幸福であることを自覚して生きるのは胸が痛いだろうけれど、それでも。少なくとも、そのことで幸福になる人間がここにはいるのだと解ってほしい。

「最近、また犬小屋に近づいているようですね」

今更のように、このことを大輔に注意したのは、ヒトガミの儀式も間近となったこの時期だったからだ。私はこの日、自身の胸中を彼に語るつもりだった。

あなたが交流を持ってしまった彼らは、はじめから椅子を奪われた人々なのだ。これからあなたはそのことをいやと言うほど思い知るでしょう。けれど、それでも悲しみを踏破して、犠牲の上に幸福を享受する覚悟をして欲しい。そう語ろうと思った。

大輔は、私の一言のあと、言い訳めいたものを口内で弄んでいる。気づけば私は大輔を叩いていた。近頃の私は、いつも苛立っている。理由は判りきっている。大輔が犬小屋に近づくのが面白くないのだ。あの場所は彼を不幸にする。

私が気を落ち着かせようと深呼吸をすると、彼は口を開いた。

「ヒトガミの儀式が近いの？」

これから、そのことを語るつもりでいても、やはり言葉に反応してしまう。大輔の口から、そんな言葉が出てくること自体、彼が生まれたときに決意した計画からはかけ離れているのだ。

私の言葉を聞いた大輔は部屋から出て行った。
それを追う事ができなかった。

未だ、私に勇気が足りない。
彼に残酷な真実を伝えることが出来ない。

大輔はそれでも見ないふりをした。

あの日から、彼は犬小屋に行っていない。

もう、彼の眼にはそれが見えているはずなのに。
そのことを聞いたはずなのに。

時折辛そうな表情を見せる以外は、以前と変わりが無い。

何事も無かったふりをして、生活を続けている。

精一杯、抵抗を続けている。

知ってしまった記憶を、消し去ることは出来ない。

それでも生きている。

たったそれだけ。

けれど、私には十分なほどの救い。

もう、何も言わなくてもいいのだろうか。

私は逃げる。責任から逃げる。

彼の傷口に触れるのが怖い。

私の言葉は、彼の背中を押してやることが出来るかもしれないのに。

大輔は一年後、村を出て行くことを告げた。

私はそれを引き止めた。

まだ、言わなくてはならないことがある。

語らなければならぬ思いがある。

彼は頑なだった。

私は引き止めることが出来ない。

やけに明るい彼の表情を見て、納得する。

いや、納得したふりをする。

きつと見てみぬふりを出来る強い子だったのだと、自分を納得させた。何もかもが間違いだったと知るのは、少し先のことになる。

シロという名前に覚えがあった。

年に幾度か確認するだけの犬の名前の中でも、その名は聞くたびに常に違和感を持って響く。受胎不可能な犬の中で、既に10年以上生かされ続けている。いや、見逃され続けている。ああ、もうどうでもいいか。大輔が村を出て行ってから、私は無気力だった。常に不安を抱え続ける必要がなくなったからだろうか。それに比例するように、犬に対する感情も杜撰になっていくのを感じている。けれど、もうどうだっていいのだ。大輔が幸福であること以外は、全てどうでもいい。そうして呆けている私に冷や水を浴びせるがごとき事件が起こったのは、大輔との別れから数ヶ月のちのことで、全国でも平均的な時期に春の訪れるこの村は、すっかり日差しも暖かくなり、桜も既に散ろうかとしていた。毎日が酷く緩んで見えるし、おそらく客観的には私自身が村の景色の何れよりも呆けきっていた。そんなとき、件のシロという名前を聞かされた私は、彼女に対して微かに、しかしずっと抱いていた疑問もどこへやら、思い出すことにすら数瞬おかねばならなかった。つづけてシロが面会を求めていることを聞き、「ここへ呼んで頂戴」と女中に告げ、またも意識を他方へ飛ばそうとしたが、妙な目つきで私を見る女中に気づき「小屋まで出向きます」と訂正して立ち上がった。

小屋の前の広場には相変わらず何も身につけないままの格好でシロが控えていた。妙に柔らかく感じる日差しを好ましく感じ、私は用件を聞くことも忘れて「いい天気」と呟いた。そうしてしばらく空を眺めていたのだが、次第に手持ち無沙汰になり、ここへ何の用事できたのか考えた。ようやく思い出してシロを見ると、ここへ来た

ときと同じ格好で地面に手をついて跪いている。

「今日は何の用でしょう」

「はい。奥様をお呼びだていたしました、」

「そういえば呼ばれたのは初めてかしら」

「はい。奥様のお役目に関わる不測の事態というものが、この何年かは起こりませんでしたもので」

なるほど、そういうものかと思いつた。

確かに受胎しても、出産しても、途中で受胎不可になったとしても、死亡したとしても、確認するのは年初の「お役目」の時だけだ。特にこの時期はまだ受胎の儀式も始まっていない。呼び出される理由が判らない。私が黙ったままだいると彼女は続けた。

「ハナが受胎いたしました、今年の受胎の儀式には出せません」

「何故かしら。処女懐胎でもしたの？」

私の疑問はもつともだろう。小屋の中にいる男性は全て幼児であるし、儀式が始まっていないのならば、どこから子種を受けるというのだろう。使用人と交わったとでもいうのだろうか。それはない、だろうと思う。儀式に参加するまで、彼女たちと交わることは堅く戒められている。相手の男性が判明した場合、村を放逐される。というよりも出て行かざるをえなくさせられる。それでも交わった愚か者がいるというのだろうか。

「相手は判っているの？」

「おおよその見当はついておりますが」

「あなたの見当はいいの。彼女から聞き出すのも役目でしょう？」

「ハナははつきりとは申しません。おそらく相手を気遣っているのだろうと思います」

嫌な予感がした。予感というよりも、根拠のある予測というのが正しいのかもしれない。ハナという名前に聞き覚えがあった。今年の年初の役目で関わった名前でもあった。そして大輔が小屋から犬を連れ出した、彼が初めて犬小屋に関わったあの事件に、その名前が出てきた。それだけ、ただそれだけなのだ。大した根拠ではない。

私は自分に言い聞かせるようにして大きく息を吸い込んだ。

シロが続けて言った言葉は、私に考えることをやめさせた。これ以上考えたくも無かった。気がついたときには私は小屋の中でハナを蹴り倒していた。私もハナもお互いに何か言ったような気がするが覚えていない。少なくとも会話ではなかったように思う。彼女が腹を庇う仕草を見せてからは、もっと激しく、何度も蹴りつけた。他の犬達に押さえつけられて、使用人に抱えられるようにして小屋を出た。私は理不尽を訴え続けた。だってそうじゃないか。私は間違ったことをしていない。悪いのはあの犬じゃないか。きっと大輔も、何も悪いことなんてしていない。あの犬が大輔を縛りつけようとして企んだのだ。いずれ殺される子どもを孕んだのだ。こんなことを知って、大輔はどう思うだろうか。きっと悲しむに違いない。いたい、あの犬は何なのだろう。犬だけじゃない、何もかもが大輔を不幸にしようとする。シンスケもハナもシロも、この家の、村の全てが。今からでも、そうだ、大輔はまだ子どもじゃないか。私が言い聞かせれば、信じてくれる。何も、何も無かったのだ。ハナは子どもを孕まなかったし、そもそも犬なんていなかった。シンスケなんて存在も、こんな家も、村もない。私だけだ。大輔の幸福を願っているのは私だけ。それ以外の、あの悪魔たちは無かったことにして、幸せだけを考えさせてやろう。お母さんがいるから、あなたはいつだって幸福なのだと教えてあげよう。

「いったい、何事だ」

ああ、こいつが悪魔だ。こいつも悪魔だ。私を押さえつける悪魔の手下を振り払う。目の前の悪魔を打ち倒す。

悪魔の上に馬乗りになって、何度も拳を振り下ろす。

私は結局敗れた。

悪魔達は私を蔵の中に閉じ込めた。

扉に向かつて、その向こうで企みを続ける悪魔を呪う。

恨み言を呟き続ける。そして泣く。懇願する。

大輔を幸せにしてやってくれと願う。祈る。

寒い冬の日も、暑い夏の日も、それらの行為を繰り返す。

時々手下ではなく、悪魔本人がやってくる。

大輔は不幸じゃないか？

それだけを繰り返す聞く。

悪魔は重い扉の格子の向こうで泣いている。

彼の涙の理由が、私にはわからない。

長かったようにも思えるし、ほんの僅かの間だったのかもしれない。
この蔵の中では、相対的な時間がわからない。

はじめの、おそらく何年かは私はずっと悪魔を恨んで過ごしてきた。
その後の何年かは、私は同じ演技を続けた。

悪魔が油断すればいい、私は私の牙を研ごうと誓った。

蔵の奥に仕舞ってあった鎧兜。

大輔の好きだったその入った箱の奥にある太刀を、私は毎夜のこ
とく眺めた。

これならば、悪魔を殺しきれだろう。

きっと大輔を助け出せるだろう。

また扉の向こうからこちらを眺めようとすれば、そのときが悪魔の
命日だ。

けれど悪魔は来なかった。

何年もの間、悪魔は私を置き去りにした。

手下がいつものようにやってきた。

食事や飲料を持ってきたのだろう。

そう思っていると、扉が開いた。

普段は、扉の下の小さな小窓から食事が差し入れられる。

この扉が開いたのは私が閉じ込められてから初めてのことだった。

「奥様、今日ばかりはここを出ていただきます」

悪魔が遂に油断したのだろうか。

あいつを殺す機会が巡ってきたのだろうか。

「旦那様をご危篤です」

ああ、あの悪魔、そんなに弱っていたのか。

なら計画は変更しよう。

他にも、殺すべき悪魔がたくさんいる。

「わかりました。すぐに向かいますから、先に屋敷に戻ってください」

手下は妙な顔をした。

ああ、いつものように喚いていないからか。

随分、考える時間だけはあった。

冷静に演技ぐらいはしてみせる。

ほら、騙されたじゃないか。

扉を開けて、その場から遠ざかったじゃないか。

私は太刀を持って犬小屋に向かう。

一番消さなくてはならない場所に、迷いなく向かう。

乾燥した空気と古びた木材は酷く相性がいい。

大した苦労も無く、炎は燃え広がった。

燃え盛る犬小屋から飛び出してきた悪魔達を切り伏せる。

首と胴体の付け根の辺りを狙う。

毎日練習していて良かった。

相手は殆ど子どもばかりだ。失敗は少ない。

失敗しても、傷を負えば相手は怯む。

怯んだ相手を切り伏せるのは容易い。

時折、子どもではない悪魔もいる。

それでも、丸腰。衣服すら身につけていない。

胴を切れば確実に傷を負わせることが出来る。

うずくまる悪魔にとどめをさす。

段々切れ味が悪くなる。

「出てきてはいけません」

そう言った珍しい、中年の悪魔を刺す。

太刀が腹に食い込んで抜けない。

その隙に子どもを抱きかかえた悪魔が出てくる。

ああ、こいつだ。こいつを殺したかった。

悪魔に飛び掛る。首の肉に噛み付き、引きちぎる。

血が噴出した。子どもが逃げる。

私は死にゆうこうとしている悪魔に取り付かれて動けない。

炎に包まれた小屋が崩れ落ちた。

炎が何もかもを包んでいく。

私は大輔のことを考える。

きつとあの子は大丈夫だ。

小屋も、悪魔も消したから。

もう何も大輔を不幸にはしない。

だから何も心配しないでいい。

沸騰していく頭で大輔を想う。

世界はこんなにも明るいから。

オレンジ色の光が、こんなにも溢れているから。

きつと世界は幸福なのだ。

犬の一族編 1 (前書き)

ラストスパート

犬の一族編 1

私は犬です。

名前はハナ。

主人の帰りを待ち続けている犬です。

あの人は私を人間だと言ってくれました。

けれど私は彼の、主人の思想を否定します。

こんなことは最初で最後です。

主人を否定することは犬には認められていないのですから。

私は良心の許す限り、自分を偽ります。

彼の望むように、人間であろうとします。

それでも私は心の底から自分が人間であることを認めることが出来ません。

人間が自分を人間であると一々確認することが無いように、私自身も犬であることを疑わずに済めば、どれほど幸福であったかわかりません。私は、自分が人間であってもいいのかもしれないと思います。そして常にそれ以上に自分が犬であることを確認し続けています。この懊悩こそが、私自身なのだとも思います。そしてそれを与えてくれたのは、あの人なのです。だから私はこの苦しみを愛おしくこそ感じるのです。きっと私があの人との与えた命題の為に、この世界から見捨てられたとしても。

ご主人様と出会ったのは犬小屋の前の広場でした。

まだ肌寒い風が吹いていたのを思い出します。

犬は、一堂に集められ、体を洗われていました。

屋敷の使用人の方々は、冬でもお構いなしに水とブラシで私達を洗います。夏場は涼しくて心地よい水も、この季節にはまだ冷たく、水をかけられるたびに私は逃げ惑います。

そんな様子を広場の隣に建てられた蔵の前で眺めていたのがご主人

様でした。ご主人様は名前を大輔様といいます。当時の私はそんなことを存じませんでしたし、人間の子どもを見たことさえ初めてでした。

ご主人様は私を手招きしました。とても嬉しかったことを覚えています。

私は幾らもおぼえていない言葉で必死に彼に呼びかけました。

大人たちでさえ、片言でしか扱えない言葉を必死に投げかけました。彼と仲良くなりたかったのです。

好奇心には犬も人間もありはしません。

遂に「遊ぼう」という言葉をかけられた時から、私とご主人様の数奇な関係が始まりました。

ご主人様は震える私を母屋の中へと案内しました。

犬が屋内に入ってはいけないということを、私は自覚していませんでした。そのことでご主人様が叱られてしまいかもしれないということも。

ご主人様の後をついて、風呂場へと入ります。

そこは私の見たことが無い世界でした。タイルで覆われた浴室も、シャワーのヘッドも、鏡も、浴槽も、全てが新鮮に見えました。私達が一生の中で目にするこすら無いであろう場所でした。

その様子に興奮していると後ろからお湯をかけられました。振り向くとご主人様がシャワーを片手に笑っていました。ホースから出たのがお湯であったことと、それが裁断され、いくつもの細い水流となって溢れ出ていたことに驚きました。ご主人様は喜ぶ私を見て、いつそう楽しい笑みを浮かべました。

不思議な気持ちになりました。目の前の人間を、敬う気持ち、慕う気持ち、認めてもらいたい気持ち、いろんなものが混ざり合って、私の胸中を満たしました。こんな気持ちは、犬小屋に住まう犬達に感じたことはありません。使用人にも、幾度か会ったことのある旦那様や奥様にも抱いたことはありません。なんとも奇妙な感情でし

た。ただこの人に寄り添うだけで絶えることなくこの気持ちは湧き上がり、幸福を感じました。それは、エサを与えられた時よりも、既に死んでしまった母に抱かれたときよりも、夏の暑い日に広場で体を洗われたときよりも遥かに幸せな気持ちでした。

当時の私は、自身が何者かということが判りませんでした。深く考えたこともありませんでした。ただ母屋に住まう人々は犬小屋に住まう私達を犬と呼んでいます。

私は今も、本当の犬というものを直に見たことはありません。図鑑に載っている写真や、文章のうちに描写された犬しか知りません。この当時は、それらの知識すらありませんでした。犬という言葉は、私たち犬小屋に住まうものを指す言葉なのだと考えていました。その認識が正しいのか判りません。けれど知ってしまった後、本来犬の内面にある何が犬を犬たらしめているのか判らない以上、私は区別に従って犬小屋に住まうものを犬として、母屋に住まうものを人間として認識しています。

人間と区別され、毎日エサを与えられ、狩りをする必要もなく、故に牙を持つ必要の無いもの。獣としての機能を持て余し、人間に愛玩されるために生きるもの。それが犬というのならば、この犬小屋に住まうものたちは確かに犬です。生物としての肉体構造などではなく、環境こそが私達の精神を犬たらしめているのです。

ご主人様はのぼせるまで遊んでくれました。私は浴びるほどのお湯も、その後に浴槽いっぱいに満たされたお湯も初めての体験でしたから、のぼせるということを知りませんでした。ご主人様もその点を忘れていたようで、タイルの上には一人と一匹がぐったりと体を横たえる結果になりました。

そうやってしばらく横になっていると段々と動悸もおさまり、景色の歪むような眩暈も消え去ってゆきました。そうなってようやく冷静にものを考える余裕も出てきたのです。

この感情はなんだろうか。すぐ隣でまだ少し速い呼吸を整えようと努力している、この男の子に対して、私はどういう気持ちを抱いたのだろうか。それは一片の言葉で説明できるのだろうか。

当時はこれほど語彙ありませんでしたが、必死でこの感情を探ろうという気持ちがありました。けれど実際に感情は感情としてそこにあるだけで、言葉を持たない私にとってそれを論理的に説明する意味はありません。私は兎に角この男の子が好きなのだ、傍にいただけで嬉しいのだ、だから嫌われないよう、いつまでも隣にいられるようにしようと考えました。

ご主人様がのそりと上体をおこし、私の方をじっと見ているのを感じた私は、何か声をかけようと思いました。けれどもそれよりもはやく、彼は拳を振り上げていました。そして私の顔を振りおろす調子にまかせて強かに打ち付けました。

一体何が起こっているのか判りませんでした。混乱しながらも、なおも殴りかかろうとするご主人様の拳を避け、浴槽の傍まで逃げました。私を殴ろうとしている、ということは何か怒りを感じているのだろうか、そう考えた私を裏切るように、ご主人様は相変わらず優しい笑みを浮かべます。笑みを浮かべたまま、やはり硬く握った拳をおろそうとはしないのです。

「楽しかったよ、また遊んで欲しいな」

そういいながらご主人様はまたも殴ります。

生暖かいものが鼻腔から流れ出て、開ききった口内へと流れ込み、舌が塩辛さを感じしました。それが地の味だと理解した私の脳が揺れました。今度は歯が折れたらしく、舌に硬い何かが触れました。幾度目かの殴打で、私は意識を手放しました。

次に目が覚めたのは足に非常の痛みを感じたからでした。

「ようやく起きたね。なかなか起きないから心配したんだ」

張り付いたような笑みは相変わらず表面だけのようで、私の足に深

々と刺さったガラス片を、更に押し込もうとします。必死で声を押し殺しました。ご主人様に悪意が無いことが判ったから。この行為が何の意味を持つのかはわからないけれど、拒絶することができなかったから。この痛みよりも、あの笑みの方が、ずっと貴重なものに思えたから。流れ出す血よりも、ずっと暖かく思えたから。痛みよりも、ご主人様の微笑を失うことの悲しみが、ずっと耐えがたく感じたから、私は耐えました。

血にまみれた手をご主人様の頬に添えます。

何かを伝えたくて、けれど私はそれほど言葉を知らなかったので、一言だけ、ご主人様に伝えようと思いました。私は母の真似をして、ご主人様を抱きます。そして最後の言葉を放つと同時に、周りの景色が歪んでゆきます。黒点が視界を塗りつぶしていく中で、ご主人様の声が聞こえたような気がしました。それは泣いているようでもあります。産声のようでもあります。

それから、あの時の感情を思い出して怯える毎日でした。

それは麻薬のようなもので、死の恐怖すら、その快樂の前には過小なものであることが、そして危険であることを知ってなお、求めずにはいられないことが、あまりにも恐ろしかったのです。

今度あの人に会えば殺されるかもしれない。

それでも会いたい。

たとえ与えられるのが暴力であっても、あの人がいるのなら。

そんな考えのひとつひとつが私の体を震わせます。

その震えや傷からもたらされる痛みすら甘美に感じるのには流石に参りました。

傷も癒え始めた頃、既に季節は夏になっていました。

その日は良く晴れていましたが、小屋の中は日中でも薄暗くありました。けれど私達は昼間は眠っていますから、その点では好都合だったのです。普段は何物にも阻害されることの無い私達の午睡は、

その日は例外的に阻まれることとなりました。

私は周囲の物音や気配で目が覚めました。

昼間だというのに煌々と輝く裸電球が眩しく感じました。目が慣れるまでは、まともに目を開くこともできません。

「君、ああ名前を聞き忘れたんだ。ごめん。それより、あの」

何かに戸惑ったような声が、段々と近づいてきます。

目を凝らすとそこにはご主人様がいました。

思わず後ずさってしまいます。

近づかない方が良く、そう理性が告げていました。

けれど感情は必死で追いつがります。

「僕だよ。忘れたかな」

私はどうしていいのか判らなくなります。

頭を振って、感情を拒絶しているのか、理性を振り払おうとしているのか、自身ですら判らないのです。そうして仕舞いには膝頭の上に頭を伏せた姿勢で、固まってしまいます。

かすかな嗚咽が部屋の中に響きました。

その声には聞き覚えがあつて、私は顔をあげます。

ああ、あのとときの泣き声だ。そう思いました。

あのとときこの人は泣いていたんだ、何が悲しかったんだろうか、今も悲しいのだろうか。きつとそうだろう。今も泣いているじゃないか。この人が悲しいと私も悲しい。どれほど暴力的であっても、いつでも笑っていて欲しい。

私はご主人様を抱きしめました。

そうして頭を撫でながら、謝りました。

私のせいで、悲しませてごめん。

私と出会わなければ、悲しくならなかったかもしれないのにね、そういう想いでいたのですが、口について出てきたのは「ごめん」という三文字の言葉だけでした。

ご主人様が顔をあげたので、私は笑って見せました。ご主人様も笑

い返してくれました。それだけで、私はこの人に殺される覚悟が出来ました。もう、怯えもしないし、迷いもしないと。ご主人様の望むとおりに在りたいと想いました。

それからご主人様はよく犬小屋を訪ねてくれるようになりました。

私はシロを真似て、ご主人様を「大輔様」と呼びました。

シロは犬小屋の中でも、唯一人間と同じように言葉が堪能に使えるので、私達はシロの言うことには出来るだけ従うようにしていました。また彼女が年長者であって、犬小屋の代表者であることも、彼女に従う理由でありました。

私が大輔様と呼ぶと、ご主人様は嫌がりました。ですが、シロの勧めで大輔様と呼ぶようにしていました。シロは主家との間で溝を作らぬよう、配慮していたのでしょうか。ご主人様がこの小屋に訪れることも、あまり良くは思っていないようでした。

ご主人様は私に色々なことを教えてくださいました。私が小屋から出られないことを知ると、多くの物語本や、図鑑や、写真集などを貸してくださいました。私は文字が読めませんでしたから、その旨を告げると、辞典を与えてくださいました。そして小屋に訪れるたびに、文字や言葉を教えて頂いたのです。

私は与えられた書物の中から、犬のことを学びました。それは犬小屋に住まう人々とはかけ離れた存在であるように思われました。けれど、私とはそれほど離れてはいないように思えたのです。

数ある犬の物語の中でも、私の目を引いたのは太宰治の畜犬談でした。

「ただか日に一度や二度の残飯の投与にあずからんがために、友を売り、妻を離別し、おのれの身ひとつ、家の軒下に横たえ、忠義顔して、かつての友に吠え、兄弟、父母をも、けろりと忘却し、ただひたすらに飼主の顔色を伺い、阿諛追従てんとして恥じず、ぶたれても、きゃんという尻尾まいて閉口してみせて、家人を笑わせ、

その精神の卑劣、醜怪、犬畜生とはよくもいった。日に十里を樂々と走破しうる健脚を有し、獅子をも斃す白光鋭利の牙を持ちながら、懶惰無頼の腐りはてたいやしい根性をはばからず發揮し、一片の矜持なく、てもなく人間界に屈服し、隷屬し、同族互いに敵視して、顔つきあわせると吠えあい、噛みあい、もって人間の御機嫌をとり結ばうと努めている」

シロを筆頭とする、この犬小屋に住まう人々がこの通りであるとは私は思いません。けれど、私自身はここに描かれている犬そのものであるのです。私はご主人様以外の何物をも捨て去る覚悟を固めました。あの方の傍にいられるだけで、それ以外の理も情も、全てを善しと感じられないのです。その様は犬畜生と呼ばわれるに相応しいと考えます。私は、便宜的ではなく、生物学的にでもなく、精神と心理の点において犬であるのです。

犬は常に人とともに在り続けました。犬の学名を「Canis lupus familiaris」カニス・ルプス・ファミリアリスといいます。語義は「犬、狼、家庭の者」で、すなわち、「広義で言う犬の一族、その中の狼という一派、更にそのうちの、人とともにある一群」との命名意図だそうです。私は犬の一族であるということに誇りを覚えます。人と共に在り、人に寄り添うものであることを、このうえない幸せと感じます。

私の中にあるご主人様に対する感情は、犬と人との間に結ばれた主従の親愛です。私は、この物語の中に登場するポチのように、ご主人様から見捨てられることのない立派な犬であらうと思います。

ご主人様は私が犬であると自己証明すると、たまらなく嫌だという顔をします。私が「ご主人様」と呼ぶと、「大輔様」と呼んだときとは比べ物にならない剣幕で、私を叱ります。

きっと犬がお嫌いなのです。私はご主人様の前では、できるだけ人間らしく振舞います。それがご主人様が私に求めるものであるのなら、私はそれに従います。それでも心のうちでは、自分を犬であ

ると卑下します。そして大輔様を「ご主人様」と呼びます。

ご主人様は、そんな私の心のうちを見抜いたように、犬小屋を訪れることは無くなりました。それはとても悲しいことで、けれど同時に私の下手な演技を見抜かれたことを反省しました。私はまだご主人様の望む姿になりきれてはいなかったのでしょうか。約束も何も無いまま、私は待ちます。人間らしくあるように、知識と演技を磨きながら、いつか犬小屋の扉を開いて、ご主人様が訪れる日を夢見て私は待ち続けます。

それから、ご主人様には会うことが無く一年が過ぎ、この年の冬、私は受胎の儀を仰せつかりました。この儀式について、私はシロから聞き及んでおりました。村の方々と交わり、子を成す儀式だと。私は犬ですから、どこかで子を孕んで主人を困らせることもあるでしょう。その点は一向にかまわないと私自身は考えています。けれど、それがご主人様の望むことでしょうか。ご主人様は、常に私に人間であつて欲しいと望んでいます。人間はが心の通わぬ相手との子を孕み、それを是とするものでしょうか。犬でありながら、私は自身の人権に想いをいたさねばならなかったのです。

けれど受胎の儀式を拒否することもまた、許されざることでした。私が「受胎の儀など嫌です」と言えば、ご主人様は満足するでしょう。そして無理を通すつもりで私を庇護してくれるに違いありません。無理は全て、ご主人様に崇ります。きっと立場を悪くなさるに違いありません。

私は様々な可能性を鑑み、「せめて初めては愛する人と」という人間の少女らしい答えを選択しました。私が名前を知っている男性とえば、ご主人様と旦那様だけです。名も知らぬ使用人と、いうのも無理があるように感じました。そして、それならばご主人様にお相手していただきたいと、そう想いました。私とて、敬愛するご

主人様に抱いていただけるのならば、嬉しい気持ちがあります。それは決して恋心などという瑣末な感情ではありませんが、ご主人様の立場を考えるのならば、女性に迫られて悪い気もしないはずですが心配することは、ご主人様は私を人間として扱ってくださいますが、果たしてそれが本心からのことであるかという点でした。犬に恋心を抱かれて、嬉しかろう筈がないのではないか。犬に抱いて欲しいといわれて、ありがたいと感じるのだろうか。そう考えると、ご主人様と私の間にある感情の錯綜は、酷く複雑なものに感じられました。

それでも、何もしないというわけにもいかないと考え、私はご主人様に会いたい意思を旦那様に告げました。奥様は大変怒っておられました。旦那様がかすかに頷いて小屋を後にしたのを見て、とりあえずは安堵いたしました。けれどご主人様をお呼び立てすることに一抹の不安を感じました。そのこと自体が犬としての領分を越えているということもありました。それ以上に、一年の間、犬小屋に来てくださらなかったご主人様は、私と会うことを好ましく思っていないのではないかという考えが、日増しに大きくなってゆきました。

その間にも、シロに様々なことを聞いておかねばなりませんでした。受胎の儀式を経験しているシロならば、男性との性交渉について、学問的な知識しかない私を教育してくれると考えたのです。

「シロ、相談があるんです」

「大輔様と会うことに関してですか？」

「はい。実は、初めての相手を、もちろん大輔様が同意くださればしていただきたいと考えているのです。むろん、受胎の儀式は受けるつもりではありますが、その」

私が俯き加減で、どこまで話してよいものか思案していると「それ以上は結構です」とシロは毅然とした声で告げました。幸先の悪いことに、シロには拒否されてしまったかとシロの様子を伺おうと顔

をあげると、シロがにやにやと笑いながら私を見ていました。

ご主人様が小屋を訪れたのはそれから数日後のことです。

といっても私は小屋の中でご主人様をお見かけすることはありませんでした。

間の抜けた話ではありますが、私はこのとき眠っていたのです。

私の眠りは深く、寝起きもそれほど良い方ではありません。

体が浮き上がるような感覚を覚え、その後振動を感じましたが、その振動に身を任せ、心地よい眠りを堪能していました。けれど、刺すような寒さに身を震わせ、目をあけるとそこはご主人様の腕の中でした。私は寝起きのはつきりとしらない頭で、ご主人様に言わねばならないことがあると動転し「あ、大輔様。えっと、あの、お話が」とそこまで言ったところで「蔵の中に行くから、話はそこで」と遮られてしまいました。ご主人様の言葉には有無をいわせぬ圧迫感があり、急に私の不安感は増大します。

この間、何度もシミュレートしてきたことが、実はそれどころではなく、ご主人様の心には全く別の考えがあつて、それはこの圧迫感から、私にとって良くない知らせのようにも感じられたのです。

ご主人様は私を蔵の前に降ろすと「少し待ってて」と言い、母屋へ入っていったかと思うと、すぐに石油ストーブを片手に帰ってきました。ポケットの中から鍵を取り出すと蔵の扉を開け、「入って」と短く言い私の背中を押して自身も蔵の中へと入りました。ストーブに火がつきます。ストーブの赤い光が、薄暗い蔵の中でぼんやりと光り始めます。私は一連の動きを扉の近くで立ったまま、眺めていました。いえ、見ているようで、何も見てはいないような気もしました。ただ、不安だけが降り積もっていきます。ご主人様は様々な気を遣ってくださいなのですが、一向に気分が上向くことはありませんでした。

ずっと感じていた、ご主人様に見捨てられた犬なのかもしれないという不安は、きつと当たっていたに違いない、会いたくも無いのに、

お呼びだてしてしまい、私を処分しようとしておられるのだろうか。そういえば、毎年この季節には、犬小屋から必ず一人が出て行き、そのまま戻っては来ない。私はその犬に選ばれたのかもしれない。それもいいかもしれないな、と思いました。

ご主人様と会えなかった一年間は、私にとって空虚なものでした。私はご主人様以外の全てに興味も関心もありません。何も無いただ広いばかりの空間に、ご主人様と私だけが存在しているような、そんな気持ちで世界を見ています。ご主人様が見えなくらい遠いところにいるとしても、時々振り向いて、私に微笑んでくださるだけで私は幸せなのです。そんな機会が永遠に失われるのだとすれば、私が生きる意味など無きに等しいとさえ思います。

今日の前にいるご主人様は、私の言葉を聞くことはありません。笑いかけてくださることもありません。目を合わせてくださることもありません。私など、存在していないように。お優しい方ですから、私が会いたいといえば、会いにきてくださいます。気も遣ってくださいます。けれど、真のところでは興味など失ってしまっているのかもしれない。

死ぬことなど、ひとつも怖くはありません。失ってしまったまま生きることほど、恐ろしいことはありません。その結果をご主人様に突きつけられるのを、ただじっと待っているような、沈黙の中、私の眼からは涙がこぼれました。これではいけない。泣いてすがって我侭を通す権利など、私には在りはしない。必死にこらえようとしても、忍耐で解決する問題ではないようで、次から次に、水滴はあふれ出し、遂にはストーブに照らされたくすんだオレンジ色の床を黒く染めます。なんとか誤魔化さなければ。別れが怖くて泣いているなどと思わせてしまえば、きっとご主人様は無理をして私の傍に居続ける。そうだ、叱られるのが怖くて泣いているということにしようか。

「ごめんなさい、大輔様。私が呼びつけなどしたから、怒っておら

れるのですね」

「違う、違うんだ。謝らなければいけないのは、僕のほうだ。僕は自分の勝手な都合で、君と会うことを拒絶した。君が会いたいと言ってくれて、僕は君に恨み言を言われることに怯えた」

「恨み言など」それ以上、言葉は出てきませんでした。やはり、ご主人様はお優しい。私に気を遣って、無理をして来て下さったのです。何を言えればいいのか、わかりません。どんな言葉をかけても、ご迷惑をおかけすることになるような気がして、口をつぐみます。

そんな私の頭を、ご主人様は撫でてくださいました。そしてぎこちない笑みをくださいました。それだけで、私はこの一年間の寂しさも空虚さも孤独も何もかもが消えてゆくを感じます。やはりこのお方は、私のご主人様なのだ。主人を何年もの間待ち続け、路上に倒れたかの名犬のごとく、私は待ち続けよう。ですから、次が何十年後でもいいから、あと一度だけ、会えるまで。

私の想いは、ご主人様に対しては、どこまでも純粹であり続けるでしょう。行き続ける限り、どれだけでも待ち続けるでしょうし、望む限り、私の何物も惜しまずに差し出すでしょう。これだけは、私が必ずご主人さんに約束できることなのです。

雄叫びとも嬌声ともつかぬ大きな声が頭上から聞こえました。私は驚いて顔をあげます。ご主人様が、嬉しげな、どこまでも明朗な笑顔で私を見ていました。突然のことに驚きました。ご主人様はそんな私の両手を取って、上下に振り回します。

「ハナ、わかったんだ。わかったよ。僕は君を救うよ。何年かかっても、きつと救う。だから待っていてよ。僕を、その、まだ信じてくれるのなら」

この言葉が、どれだけ嬉しかったことか。ご主人様の言葉には、少しの無理も無いことがわかりました。この方は、どんな形であれ、未だ私を望んでくれているのだ。そう思うと、私の一生をかけた願いが叶ったような気持ちになれました。こ

のままご主人様が二度と私の前に訪れることが無くても、私は覚悟だけで行き続けることができるような気がしました。

私はこの日、ご主人様に抱いていただきました。

犬としての分を超えて扱っていただきました。

私はこのお方の前でだけは人間だったのです。

ですから私は、このお方の前でだけは人間であり続けます。

ご主人様はその春、村を出て行きました。

私を人間にする手段を捜すためだと、教えられました。

旅立つまでの間、ご主人様は何度も私を求めました。

求められる間、私はご主人様の犬でいられるのです。

ずっとご主人様と共に在っただけで、これほど幸せな時間はありませんでした。こんなにたくさんのもを頂いたというのに、私に出来ることはただ待つだけなのかと、申し訳ないようにも思えます。

ご主人様が屋敷を去って少しばかり時が経ちました。

受胎の儀式に出ることになる直前になって、私は体調を崩してしまいました。人間たちは、この小屋に住まう犬達の体調には無頓着であるように思われるかもしれません。確かに、概ねはその解釈が正しいのですが、例外も認められているのです。それが受胎の儀式に出る犬でした。

伝染病の類であれば、交わる人間の方々にも迷惑をかけることになります。性病、流行性感冒、それらの危険がある場合、完治するまでの間は受胎の儀式を免れます。けれど、けして治療を受けることは叶いません。仮に死んでしまうような病であっても、自然のままに死にゆくことになります。そうやって私達は増えもせず、減りもせずにこれまでの数百年の間、血脈を保ってきたのです。

私は激しい嘔吐を繰り返し、食事すら俣なりませんでした。シロはそんな私の体調を気遣いましたが、同時に不安げな表情も見せまし

た。原因不明の嘔吐がようやく収まってきた頃、私は受胎の儀式に出るために医師の検査を受けることになりました。医師は、ここで見たこと、聞いたことを決して他言にはしません。それは屋敷の用人や、主家の方々に対しても同様です。全てシロが管理し、奥様に報告することになります。

医師から報告を受け、礼を言って引き取っていただいたシロが私の元に近づき、腹部に目をやって、溜息を憑きました。私は、もしかすると悪い病かもしれないと考えましたが、吐き気も収まってきたことを考えると、それだけではないかもしれぬと思い至りました。私が黙ったまましていると、シロは私に懷妊を告げました。

この事実をどう受け取るべきなのだろうか、と考えるよりも早く、先ず私の頭に浮かんだことは「ご主人様に迷惑をかけることになるのではないか」ということでした。掟や規則は知りません。しかし、それらがどうこうというよりも、私達は犬なのです。まるで犬として扱われている賤民というべきかもしれませんが。私が犬であるという自覚よりも、この際重要なことは周囲の認識です。その点を考えて、いささかご主人様としては拙い立場にあるのではないかと考えていました。

「やはり相手は」ここまで言って、シロは口を閉ざしたままで私をじつと見ています。シロとしても認めたくない点があるに違いありません。主家の人間が不祥事を起こして、相手が犬。事實は兎も角、何れが責任を負うことになるかは明白です。これから犬小屋の人々の立場が悪くなることを考え、シロは弱りきっているのだらう、私はそう考えていました。

けれど、シロは笑っていました。卑しい笑顔でした。醜い笑い声でした。そうして「よくやった」と何度も私の肩を叩き、喜ぶのです。私はシロの心を量りかねました。そんな私の様子を見て、シロは「わからない？ わからないでしょうねえ」といつてにやつきます。

「あのクソガキが、来るなといわれて逆に来なくなるのは判ってい

たのよ。それでゴマでもすって、待遇が良くなればそれで善し。伸輔が嫌な顔をすればなお善し。そう思っていたのに、思っていたより馬鹿だったね。犬の娘と契ったことで立場が悪くなれば最高だったというのに。あんたも上手いこと孕んだもんだ」

シロがどういう所以で主家を恨むのか、解るような気がしました。彼女は人間です。犬は私だけで沢山です。そんな彼女が、知識を得てプライドを持ってしまったことが、きつと不幸だったのでしょう。私では永遠に量りえない、辛酸を舐めたに違いないのです。彼女にとって、生きることは地獄だったのでしょう。

それに私のことや他の犬のことを何とも思っていないことなど決して無い事も解っていました。十数年という時間を共に過ごしてきて彼女が仲間を蔑ろにするような人間ではないということは、理解していたのです。彼女にとってこの計略は、あわよくばという微かな期待でもって構成されていたのでしょう。別に私を利用してどうのこうのという気は無かったはずです。

それだけのことが解っていても、私は気持ちを抑えることができませんでした。ご主人様を侮辱されたことが許せませんでした。「同族互いに敵視して、顔つきあわせると吠えあい、噛みあい、もって人間の御機嫌をとり結ばうと努めている」蓄犬談の一説が浮かびました。ああ、やはり私は犬なのです。それ以上のものでありえないのです。

他の犬たちの仲裁で私達は矛を収めました。

シロは終始、私に平謝りをしていました。

無神経だった、済まない。そう繰り返しました。私に謝ったってしょうがないのです。

それにシロは、発言を撤回はしませんでした。

シロの主家に対する恨みは、晴れようがないことを、そして彼女にとってその感情は誤魔化しようが無いことを知りました。それが解ったからといって、私はシロを許せそうにはありませんでした。こ

主人様に対する彼女の感情も、悪意を持って行われた謀も、私は理性をもつて押さえ込むことなど出来ませんでした。私が犬たる所以がここにあります。

ほどなく犬小屋への食料の供給が途絶えました。

食料を受け取りに行った犬は、使用人から「貴様ら犬のせいで、奥様がどんなにか辛い目におうているか、考えるがええわ」そう冷たく言い放たれたといいます。そして、使用人からの悪意は、小屋の犬達に宿って、私に降りかかりました。

シロがなんとか食料を回してもらえるように交渉してくれたおかげで、飢死の危険は免れたものの、食料は普段より劣悪で、量も少なくなりました。腐ったの残飯でも、それらに小便をかけられていても、飢え死によりはましです。彼らは嫌々でもそれらを貪りました。それでも私に食事が回ってくることはありませんでした。僅かな食料を、その原因を作り出した私に回す気など無い、そういうわけです。

そんな私にシロは自分の食事を差し出しました。

「お腹の子の為に、食べなさい。その子は私の復讐そのものであるのだから」

そういつて悪意のこもった笑いを浮べます。けれど、彼女がそれだけのために私に食事を差し出すほど底の浅い人間ではないことを私は判っています。彼女の心は「気にすることは無い」そう言っているようでした。自分のせいで苦境に立たされている私に対する申し訳の無さもあつたでしょう。小屋の代表として、住人を生かさなければならぬ義務もあつたでしょう。それでも彼女は私に食事を差し出したのです。

シロを死なせるわけにはいかない。そう思ったに違い在りません。小屋の住人達は、食事を私にも公平に分けるようになりました。彼らは紛れも無い人間です。ひとつの感情のために何もかもを投げ出す私などとは違います。仲間を思いやり、理性で感情を抑える術を

持っています。

私はどうなのだろう、と思います。ご主人様の子どもを孕んだことで、私は人間であることができるかということを考えるようになりました。ご主人様が言うように、私は人間であってよいのだろうかと考えるようになりました。私がこの子を産むことになるのは、能動的な意思が働いた結果ではありません。墮胎手術など受けられるような環境ではないし、あえて流産するように自らの体を壊したり、弱らせたりすれば、私はご主人様との約束を果たせなくなるのです。待ち続けることができなくなるのです。やはり私はご主人様以外の何物にも興味が無いのです。

次第に大きくなる腹部を押さえて、犬の腸を嚙ります。与えられる食料は、日に日に粗末になり、遂には人の食べるものですらなくなっていました。それでも私は犬の死体を貪りました。ただ約束を果たすために、感情を満たすために、ご主人様のために、自分のために、生きるために。何が正解かは判らなくなっていました。けれど、そのどれもが犬足りえる回答なのだとも思いました。

「この子は、人間に育てなければならぬ」

私はそう考えていました。人間のふりをして、ご主人様に戯れで放った言葉を、そのやり取りを思い出します。初めて交わったあの夜、ご主人様がこの子に与えた名前を思い出します。

「子どもが出来たらどうします」

「出来てもその子は辛い運命にはならないよ」

ご主人様の言葉には強い意志が感じられました。

そして突然の沈黙と、考え込むような表情。

少しでも、この表情を明るく出来れば良いと思いました。

「名前をつけてください」

「ハナの子どもだから、花はつけないと」

僅かに表情は和らぎました。

そしてやはり考え込んでしまいます。

この話題から離れたほうがいいだろうか。

「未だ君の知らない世界、音楽なんかも聴けるようになっていね。音楽は文化の象徴だから」

「そういえば音楽は聴いたことはありません」

それは犬には過ぎたものです。

するとご主人様は何かをおっしゃいました。

その言葉を聞き取ろうと、耳を済ませました。

独特の発音。音の高低。連続、連続、大きくなり、強くなります。

ああ、これは歌だ。私が初めて手に入れた、唯一の歌だ。

「ごめんね、あんまり上手なくて」

「いえ、ありがとうございます。初めて聴く歌を大輔様が歌ってくださって、私は幸せ者です」

「なんだい、オーバーだなあ」

ご主人様が笑います。私も嬉しくて笑い出します。

私は呼びかけました。

「お父さんがくれた名前ですよ。花音」

そして歌を歌います。

歌の名前を知りません。

けれど、そんなものは必要ないのかもしれない。

私にはこれだけしかないから。

この子に伝えてあげられる、唯一の歌だから。

貴方は人間なんです。

拙いけれど、たった一曲しかないけれど、歌を聴いて育つことから。

花音が生まれてから、私は受胎の儀式へと出るようになりました。

私を見て、使用人の方々は、罵ります。

ご主人様を誘惑した淫売だといいます。

奥様を狂わせた悪魔だといいます。

そのどれもが違うのではないかと考えます。

私は犬です。精神のありようが犬なのです。

人間と比して卑しいだろうと思います。

ただ、それだけです。

村の方々は私を抱きます。

犬を抱くのです。

それが不思議でたまりません。

むろん、私のなりは人間のそれです。

だからといって、犬を抱けるものでしょうか。

けれど彼らは嬉しそうに私を抱きます。

ここで欲望を垂れ流す彼らは人間なのでしょいか。

犬を抱いたから、犬だというのはありません。

彼らの理性は、果たして人間の持つそれでしょうか。

儀式に出るようになって、数年経ちました。

いつものように、コンクリートで塗り固められた部屋の中に入ると、見たことのない男性が二人いました。時々はあるのです。村の若者が初めて儀式に参加する日。彼らははじめて見る私達に、大抵は戸惑います。人間が犬のように飼われているという事実。そして欲望のはけ口にされているという事実。彼らの態度も、それまでの若者達と同様でした。次第に彼らは人間を犯す行為に、欲望に身を任せるようになります。

この数年で判ったことは彼らは私の精神のありようなど、どうとも思っていないということでした。私が犬であろうと無かろうと、そんなことはどうだっていいのです。姿かたちが人間であれば、それを抱くだけなのです。この点がご主人様とは違いました。ご主人様は私が人間であると断定していたからこそ抱いたのです。欲望を

垂れ流したのではなく、愛情を注いだのです。

私にとっては、犬にとっては、自身が犬であるということを肯定する意味で、寧ろ村人の対応の方が、受け入れることが出来ました。むろん、ベストではなくベターではありませんが。村人達は私が犬であるか否かという命題に答えを与えようとしませんでした。私は自分が犬であるのか人間であるのかを知りたかったのです。

ご主人様は正反対の答えを提示しました。ここから全てが始まりました。犬の生活の中で、曖昧な回答を提示するばかりの村人や使用人たちを相手にしていればきっと疑問が芽生えることも無かったです。私とて、常に主観のみに拠って自身を犬だと断定し続けることが出来たわけではありません。当時の私は人間と犬との間で揺らいでいました。

人間であると思って私を抱くご主人様。人間であろうと犬であろうと深く考えはしない村人。私を犬として犬であるが故の対応をもつて接する人間は存在しませんでした。

私は果たして犬なのだろうか。疑問は深まるばかりでした。それは花音を育てていたことも大きく影響していました。犬である私が、花音を人間として育てている。ご主人様は、花音を残すことで、犬であるのか人間であるのかという命題から私を逃がしはしませんでした。むしろさらなる深みへと誘いすらしました。

コンクリートの部屋の中で、私は他の村人に促されるままに、若者の陰茎を口に含みました。いつものように、口内で弄びます。ここに初めて訪れるものは、決まって私を抱くことを拒否します。けれど、このように私から擦り寄ると、それ以上は拒みはしないのです。この若者もきつとそうだろうと考えました。

けれど、若者の陰茎は勃起しませんでした。私は不思議に思い、若者の顔を見上げます。彼と目が合ったとき、私は彼の瞳に真実を見出しました。そこに存在するのは、犬と人間なのです。彼の表情は、瞳は、陰茎は、そう告げていました。彼は私の口内から陰茎を引き抜くと、部屋を去り、その後二度と現れはしませんでした。

花音が八歳になった年、私は死にました。

私はご主人様を裏切りました。

待ち続けることが出来なかったのです。

生きつづけることができなかったのです。

そして、最後の最後で犬であるという決定的な回答さえ手放しました。

私は自身の命も、自身の感情も、ご主人様も、ご主人様との約束も、犬であるという自己証明も、全てを失うことになりました。それらを後悔しないわけはありません。

けれど、全てを犠牲にして護ったものは確かにあります。

彼女は人間です。ご主人様と私の出した回答なのです。

私が犬であつたか人間であつたかは判りません。

それでも私はこの生涯に結構満足しているのです。

犬の一族編2（前書き）

これがやりたいがために8万字も使いました。
うまくラストに集約できてよかった。

犬の一族編 2

夜は嫌い。

お母さんがお仕事に行ってしまうから。

同じくらいの子どもがたくさんいるけれど、誰も私の本当の名前を呼んでくれない。みんなは私をクロと呼ぶ。お母さんは私を花音と呼ぶ。それが私の本当の名前だという。ここには居ない、お父さんがつけてくれたのだと言う。私が人間である、それは証明だと言う。

朝は嫌い。

お母さんが疲れた顔で、嫌なにおいを漂わせる。

それでもお母さんは笑う。

「私は犬だから、しょうがないんですよ」

私は人間なのに、お母さんは犬だ。

事情は複雑怪奇なりだ。

「お母さんも人間でいいじゃない」

私がこう言つと、お母さんは困った顔をする。

こうなると負けだ。何も言えなくなる。

真昼にお母さんの胸の中で眠るのが好き。

まどろみながらお父さんの話を聞くのが好き。

お父さんは人間なのだとお母さんは言う。

私を迎えにくるために、遠い街で勉強していると言う。

お父さんと出会ったときの話をしてくれる。

突然お母さんは殴られたんだと聞いたときは、悪いやつだと思った。

でも話が進むにつれて、だんだん良いやつになる。

私はこの話が好きだ。

お父さんの気持ちを想像するのが好きだ。

お母さんは話が終わると、お父さんがくれた歌を歌う。
私にだけ、こっそり聴かせてくれる。

小屋に住んでいる、他の子ども達とは遊んではいけない。
私は子ども達の前で、喋ってはいけない。

シロやお母さんが決めたことだという。

彼らは言葉を覚えてはいけない、知識を得てはいけない。
犬が知識を得ることはいけないことなのだという。

彼らが犬で、私が人間なのは何故なのだろう。

この疑問を口にする、シロとお母さんは喧嘩する。

シロは、私も犬だと言う。

お母さんは、人間だと言う。

難しい問題なのだ。

私には答えなんてわからない。

けれど、少し寂しいと思う。

小屋の中にある本は、私とお母さん、シロしか読めない。

この本はお父さんがくれたものだという。

私はお母さんがお仕事をしている間、ひとりでそれらを読む。
読めない文字があると辞書をひく。

わからない部分があると、シロに尋ねる。

シロは私に質問されると、悲しい顔をする。

シロはなんでも知っている。なんでも教えてくれる。

「知りたいよね、人間なもの」

「シロは知りたくないの？」

「知りたかった。知りたくなかった」

シロは複雑怪奇なことを言う。

考えてもわからないけれど、これは聞いてはいけないことのように
思う。私はそれ以上、シロに尋ねることはできない。

一年に一度、おじさんが小屋にやってくる。

シロやお母さんは、おじさんを旦那様と呼ぶ。

旦那様は私達の名前を確認して、紙に何かを書き込んでいく。

クロという名前が呼ばれても、私は返事をしない。

何度も呼ばれるが、それでも返事はしない。

シロが旦那様に謝る。お母さんは私の頭を撫でた。

旦那様は、私を見つめた。

少し、悲しそうだった。

旦那様は私の前まで来ると、そこにしゃがみこんだ。

私のすぐ目の前に旦那様の顔がある。

「何故、返事をしないのかな」

「私、クロじゃないもん」

「シロ、この子はクロじゃないのか？」

「はい、すみません。その子はクロです」

シロは地面に膝を突いて、頭を下げる。

「私、クロじゃないもん。お父さんが私に花音って名前くれたもん」

「あなたはクロです！犬のクロです！」

シロが大きな声を出す。私は少し泣いてしまう。

負けてはいけないと思った。涙をこらえる。

「犬か人間かわからないけど、私は花音だもん！」

頭の上に、ぬくもりを感じた。

旦那様が立ち上がり、私の頭を撫でていた。

視線を旦那様に向けるが、その表情は見えない。

「花音」

旦那様が私の名前を呼んだ。

しばらく考えて、ようやく判った。

私は大きく返事をする。

旦那様は紙に何かを書き込む。

毎年冬になると来る旦那様が、その年は来なかった。

その前の年に来たとき、旦那様は車椅子に座っていた。

どこか体が悪くなっているようだった。

もしかしたら、死んでしまったのかもしれない。

シロに尋ねると、少なくとも死んでいるという事は無いようだ。旦那様が来る数カ月後には、小屋に住む誰かがいなくなる。

シロやお母さんがいなくなったら怖いな、と思う。

そう言うと、シロは笑って「いなくなりたいんだけどね」と言う。もしかしたら連れて行かれた人は、桃源郷に行くのかもしれない。

お父さんの残してくれた物語の中に、そんな話があった。

もしかしたら旦那様は仙人なのかもしれない。

そんなことを言うと、お母さんは怒る。

八歳にもなって、いつまでそんな話を信じているのかと言う。

私にだって、そんなことは解っている。

小屋の外には、山や川や畑や海や、コンクリートでできたビルに囲まれた街や、たくさんの人が行き来する通りがあつて、自動車や電車が走り、飛行機が空を飛んでいる。それらは全て科学や化学で説明できる。人はいつまでも空想の世界には浸ることが出来ない。けれど、少しくらいいいじゃないかと思う。目にしたことを空想で説明することが許されなくても、見たことのない世界ぐらい、空想で作り上げたっていいじゃないか、そう思う。

真昼、私が眠っている時間。

お母さんに揺り起こされる。

こんなことは初めてだった。

お母さんも私も起きるのが遅い。

眠る時間が他の人たちよりも長い。

けれど、少しだけ私の方が早く起きる。

お母さんを起こすのは私の方だった。

起きると、なんだか小屋の中が暑い。

寝惚けた頭で考える。

今は冬だったと思う。

目覚めるととても寒いはずだ。

それにやけに明るい。

いつもの電球の光ではなかった。

だんだんと頭がはつきりしてくる。

小屋は燃えていた。周囲の壁が炎の揺らめきに包まれている。

お母さんは私を抱いて、出口へと向かう。

小屋の外から、声がする。

開け放たれた扉の向こうに、シロの蹲る姿が見える。

シロのお腹には、何かが刺さっていて、そこから血が流れている。

「私が捕まっても、逃げなさい。」

お母さんが言う。

私は抱きかかえられていて、表情を伺えない。

もしかしたら、お母さんもシロみたいになっちゃってしまいかもしれない。

私は嫌だと言った。

するとお母さんは強く抱いた腕を緩め、私の眼を見据えた。

「花音は私の出した答えだから、お父さんに会いなさい」

そう言くと、また私を強く抱き、小屋の外へ飛走り出した。

何かがぶつかる強い衝撃。

お母さんの腕の力が弱まる。

私は腕をすり抜け、お母さんに呼びかける。

返事は無かった。お母さんの首筋からは血が噴出している。

何かに捕らえられている。あれはきつと悪魔だ。

悪魔が、お母さんを喰っているんだ。

あんなに血が出たら、死んでしまう。

けれど、お母さんの手は、私を押した。

「はやく行きなさい」と言っているようだった。

私は走った。逃げようとは思わなかった。

辿りついた屋敷の窓を叩く。

誰か、お母さんを助けてと叫ぶ。

屋敷の中から、おじさんが出てくる。

おじさんと一緒に、小屋へと走る。

そこには小屋だった瓦礫が燃えていた、お母さんも悪魔もどこにもいなかった。

逃げられたのだろうか。

助かったのだろうか。

次々と人が集まり、口々に消火を呼びかける。

私は燃える瓦礫を見つめていた。

私は畳敷きの部屋の中にいた。

畳を見たのは初めてだったし、襖や塗り壁も見ることがなかった。

素直に喜べなかったのはお母さんが心配だったからだ。

部屋の外には知らないおじさんが立っていて、お母さんの消息を尋ねても何も教えてはくれない。黙って部屋の中にいると言う。私はここから抜け出してお母さんを捜したい気持ちでいっぱいだった。けれど、なにひとつ教えられないまま数日が過ぎる。

この部屋は、何もかもが知識の上でしか知らないものばかりだった。毛布ではなく布団がある。

この感触にはいつまで経っても慣れない。

ふわふわとしていて、安定しない。

眠りが深いはずの私が、中々眠れない。

お母さんが心配だからか、布団のせいかわからない。

初めて衣服というものを与えられた。

肌にまとわりついて、少しこそばゆい。

これを着ていれば、きっと外でも寒くは無い。

部屋の中は春のように暖かい。

取り付けられたエアコンが作動している。

どういう仕組みなのか、よくわからない。

ただ室温を調整する機械としか知らない。

お盆の上に、水差しとコップがある。

水が無くなれば足してくれる。

水道水とは少し違う気がした。

ミネラルウォーターというやつだろうか。

小屋の前の広場から見た、母屋の窓硝子しか知らない。

硝子製のコップや水差しは初めて見る。

トイレは小屋の中にもあった。思えば、小屋の中の蛇口とトイレと裸電球は唯一の文明の利器だったのかもしれない。トイレなどはこの屋敷と同じ水洗式だった。そうしなければ不衛生極まる結果になっただろうから、当然かだろうか。

用を足したくなったときは、部屋の前のおじさんに告げる。

おじさんはトイレの前までついてくる。

抜け出す隙と言うものがない。

食事は日に三度与えられた。

いつもは日に二度しか与えられなかったから、少し嬉しい。

内容もまるで違っている。

知識では知っていたが、箸を使うのは初めてだ。

汁物を啜るのも初めてだ。

暖かい食事を取ることも初めてだ。

魚や肉や漬物や野菜の切れ端が混ざった飯しか食べたことが無い。

この膳は材料は同じだが、きちんと器に並べられている。あれは残飯だったのだと知る。こういった食事が一般であることは知っていた。一方で私達の食事は作り方が雑ではあっても、そういった料理なのだとも思っていた。

私は急に人間の生活を与えられたのだと理解した。

いつも部屋の前にいるおじさんが、私を呼んだ。

ついてこいと指図する。

私はおじさんの後に続いた。

もしかするとお母さんに会えるのかもしれない。

案内されて入った部屋の中には旦那様がいた。

旦那様は布団に入ったまま、上半身だけ起こしていた。

おじさんと、白衣の、おそらくはお医者さんが部屋を出て行く。

部屋の中は静かだった。

旦那様の呼吸音が、かすかに聞こえる。

私のいた部屋もそうだったが、この部屋にも何も無い。

それでもいくつかの違いはあった。

白い水蒸気をあげる加湿器と、旦那様の腕までチューブで繋がった点滴と、お盆の上にはコップと水差しの他に、白い紙袋が載っている。それに退屈しのぎに読むのだろうか、幾冊かの小説本が、畳の上に積み上げられている。

旦那様は咳を一つすると、言葉を紡いだ。

「待たせてしまって済まない。なにせ、数日前までは死に掛かっていたのだ。だが、もうそれどころではないと体が悟ったのか、この数日で大分具合が良くなったので、何をにおいても君に会おうと思った」

精神論で体が良くなったりするものだろうか。

私は思ったことを口に出してしまった。

どうも私は旦那様の前では素直になりすぎるくらいがある。

「精神の作用でバイオリズムが低下していたのだろうか？ 私にも良く解らない。医者は奇跡だとか、長生きするとか言っているが、おそらく死期が何ヶ月か長らえたただだろうよ。私の耳には入らないようにしているらしいが、良くない病だということぐらいは自分でもわかる」

今年の冬、旦那様が小屋を訪れなかった理由が判った。

シロが「少なくとも死んではない」と判っていたのは何故だろう。

そのことも旦那様に聞いてみた。

「ああ、私が死ねば、大輔が変わって当主の役目を継ぐことになるだろうから、大輔が来ないということで、私が死んでいないことを

察したのだろう。大輔というのは私の息子で、君の、ああ、これは話さなければならぬことだが、それよりも先に、教えておかなければならぬことがある」

このときようやく私はお母さんの死を知らされた。

半ば判っていたことだった。

あの出血では、助かっているはずが無い。

お母さんの遺体は、焼けた小屋の下敷きになったそうだった。

私は遺骨と言う形で、お母さんと対面した。

心のどこかで諦めていたはずなのに、涙が流れた。

何故お母さんが死ななければならなかったのか。

あの悪魔は一体なんだったのか。

それらの答えを、旦那様は語らない。

一冊の手帳を私に指し示す。

「この中に私の知る限りの全てを記しておいたから、これは君のお父さん、私の息子なのだが、大輔の手に渡るようにしておく。来年には、あいつも帰ってくるから、この手帳の内容を話すか話さないか、話すとすれば君が幾つになったら話すのか、全てを委ねる。花音は大輔の娘だからね。ただ、あいつが君に何も語らなかったとしても、それを責めないでやってくれ。詮索しないでやってくれ。必ずしも、知ることだけが正解とは限らない、そういう内容なのだ」

私はお父さんの使っていた部屋をあてがわれた。

よく日のあたる、暖かい部屋だった。

本棚に目をやる。お父さんの本棚だ。

小屋の中に1巻だけあった小説の2巻を見つける。

同じ作者の、別の作品を見つける。

私はそれらを読む。参考書や、図鑑を読む。

お母さんがいない寂しさを紛らわす。

それらを読むとき、隣にはお父さんがいた。

棚にあるCDを、音楽を聴く。

お母さんの歌った歌は、その中には無い。

部屋の中に響き渡る音の中に、お母さんはいない。

高く澄みきった、あの音は無い。

私は寂しさに涙を流す。

そんな私を、ぼやけた輪郭のお父さんが慰める。

写真の中にだけいる、お父さんが慰める。

私ははつきりしないお父さんの像を、明瞭に見据えようとして、また本を開く。そこかしこに散らばっている、お父さんの欠片を集める。歪んでよく見えない写真の前で、私は本を読み続ける。

食事は旦那様と共にとる。

そんな私を見る、使用人の表情は様々だ。

蔑むような眼で、笑顔を作ってみせるもの。

悲しげな顔をするもの。

切齒扼腕し、私を蛇蝎のごとく嫌うものもある。

食卓には様々な感情が錯綜している。

同情や憐憫や憎悪や蔑視や、それは人それぞれだ。

私と旦那様は、彼らの感情を全て無視する。

気づかないふりをして食事を続ける。

私は箸をまだ上手く使えない。

手づかみで食べるわけにもいかず、私の膳の上はいつも汚れている。里芋をテーブルの上に落とすたびに、使用人のあいだから嘲笑がこぼれる。

ひそひそと何かを耳打ちしあっている。

私はそれも無視する。食事に集中しようとする。

そんな私の様子を、旦那様も笑っている。

声はたてない。ただ、微笑んでいる。

私はこの笑みが、嫌いではない。

旦那様は、消化によさそうなだけではなく、味覚にも配慮されてい

るであろう粥を啜る。音をたてて啜る。あまり行儀が良くない。使用人たちの笑いが止まる。私が里芋を膳の上に落としても、誰も笑わない。

私は旦那様が好きだ。

旦那様の容態は、またも悪化していった。
食事の席にも現れることはなくなった。

箸を上手に使えるようになったが、旦那様はそこにいない。
人としての当然を、誇るべき相手がいない。
窓の外の景色が、明るく燃える頃になった。

旦那様は私を呼び出した。

もう上体を起こすことさえままならない旦那様がそこにはいた。
私は何も言えずに、俯いていた。

旦那様が急に人払いをする。

お医者さんは、私だけでも残りたいと言う。
もういいのだ、と旦那様が言った。

お医者さんはうやうやしく頭を下げて、部屋を出て行く。

旦那様が私に謝る。

すまない、と何度も言う。

私は謝られる理由が思い当たらない。

「花音と、犬小屋の人々に詫びているのだ」

旦那様は泣いている。

つられるように、私も泣いた。

この人はもうすぐ死ぬのだ。

お母さんも、シロも、旦那様も、みんないなくなる。

私だけが、この場に残り残される。
それは酷く寂しいことだと思った。

「何もしてやれなかった」

旦那様は言った。

それが何を意味するのかわからない。

けれど旦那様がなにもくれなかったとは思わない。

私を花音と呼んで、私を人間として扱ってくれた人。

それだけで十分にも思われた。

私がこう言つと、また大粒の涙が旦那様の頬を伝う。

せめて、この涙を止められたらと思う。

「神様、私の与えられるものは全て与えたとして、彼女は救えないのか」

旦那様は呟くように言う。

「与つるは、受くるより、幸いなり」という言葉を思い出す。

この人は聖人なのだと思った。

私は、最も欲するものをせがむ。

「お父さんの話をして、どんなことでもいいから」

旦那様は驚いたような顔をした。

私は彼の手を握る。やせ衰えている、大きな手だった。

旦那様は笑いながら、また涙を流した。

そうしてぼつりぼつりとお父さんのことを語った。

嘘つきだったお父さんの、何気ない日常を語った。

それはお母さんの話にも似て、はじめは悪いやつだった主人公が、

かわいそうな子どもが、ヒロインのために悩み、苦しみ、奮闘する

物語で、最後には良いやつになってしまうのだ。

ありがとう、おじいさん。

私の言葉に微笑んだ、その顔のまま、おじさんは死んだ。

こんな表情で死ねるのなら、少しは幸せであれただろうか。

おじいさんは笑っていた。

私は泣いていた。

ここは犬小屋でも、お父さんの部屋でもない。

窓一つ無い、コンクリートに塗り固められた部屋だった。

薄汚れたベッドと、水道の蛇口と、トイレがある。

それ以外には何も無い。

着衣も使用人に剥ぎ取られた。

一日に二度、残飯が与えられる。

この部屋には誰もいない。

お母さんも、シロも、おじいさんもいない。

私の隣にはお父さんがいる。

まだ少しぼやけているけれど、随分像が安定したお父さんがいる。

欠片を組み立てた、つぎはぎだらけのお父さんがいる。

「僕はずっと真実が与えられなかった。ハナは自分のことを犬だと言った。父も母も使用人も村人達も、誰もが自己証明をせずに済む幸福を与えられている。けれど、僕は自己証明すら出来なかった。何者でもなかったのだ。僕にとっては真実など存在しない。何もかもが嘘で、本当が無かったんだ。自身の行為にすら意味を与えず、自分が何をやっているのかが常にわからなかった。ただ、空虚な感情だけがそこには存在していた。

ルールのわからないスポーツの試合で、なんとか形だけでも整えようと必死に人まねをしてみるようなものだろうか。僕の行動は時々正解だったりするのだけれど、殆どが失敗ばかりだった。このスポーツはよほど複雑なルールだったのだろう。

ハナに出会ったのは、そんな日常の中だった。僕はトモダチというものが良く判らなくて、なんとか真似をしてみようとした。途中までは結構上手くできていたと思うんだ。けれど、やっぱり失敗した。僕はハナを傷つけてしまったんだ。しかもハナが傷ついたことにさえ、気づいてはいなかった。

けどね、ハナはそれでも笑うんだ。本当に優しくに笑うんだ。僕の頬に手を添えて言うんだ。「やりたいように、して。私、それでも、

あなた、好き」

僕は、そのとき解ったんだ。ルールなんて無いんだ。こういうとき、こう感じなくてはならない、なんて馬鹿げたルールは存在しないんだ。感情の意味は自分が作るんだ。自分は自分が造って良いんだ。世界は自分とそれ以外なんだって解った。自我の芽生えというやつだろうか。随分と遅まきではあったけどね。

僕は嬉しかろうが悲しかろうが泣くしかできない、産まれたばかりの赤子だったんだ。産道を通って、初めて外界に触れた瞬間の赤子って言うのは、きっと何も解らないんだよ。自分さえ、わからないんだよ。僕は赤子よりも知識だけはあったし、泣く以外にも色々、自分を表現してみたけれど、実は何の選択肢も自分の中にありはしなかった。それを与えてくれたのがハナだったんだ。

僕は、ハナを好きだと思った。好悪という原初の感情だ。そうしたら、ハナが何の意識もなく、倒れているのが悲しくなった。このまま起きなかったらどうしようと思った。自分がやったことを後悔した。僕は泣き出してしまったよ。

それから、僕とハナとの物語が始まった。

ハナは、僕が何度も逃げ出して、何度も諦めようと思っても、ただ待っていてくれた。そこにハナの笑顔があった。僕の全てがそこにはあった。恋愛や友情や情欲なんていうものよりも、もっともっと大きな何か。いうなれば「宇宙規模の愛」っていうヤツかな。惚気じゃないよ？僕の宇宙がそこにはあった。人の頭脳のうちに存在する、広大な宇宙が。

ハナ、聞こえているかい？

ご覧 暗い雲が消え去った 太陽が輝いてる。
明るい光がさし始めた。

新しい世界が開けてきた。

人間の魂は翼を与えられていた やっと飛び始めた。
虹の中に飛び始めた 希望に輝く未来に向かって。

輝かしい未来が君にも私にもやって来る　我々すべてに！

僕が好きな映画で、主人公が語った言葉だ。
世界に向かつて、叫んだ言葉だ。

いつかこの映画を観よう。

僕と、君と、あの日君が語った夢の子、花音と。」

私の周りには大勢の人がいる。

中には見知った使用人もいる。

彼らは私を差し置いて、話し合っている。

「まだ幼い子よ、可哀相よ！」

「今までだって、幼児は殺してきただろう！」

「大輔様の子を殺すのはまずかろう」

「じゃあ、俺達が代わりに死ぬのか？」

「この子を殺しても、一年経ったら結局わしらも死ぬじゃないか」

「一年と数週間ではえらい違いだ」

「伸輔様はこの子を孫だと認めていたわ」

「まだそんなことを言っているのか。あいつは裏切ったんだ」

「そうだ。全て話して警察だと？笑わせるな」

「伸輔様は清廉な方だったのよ」

「清廉な人間が、今まで牛太郎の真似事やら殺人の元締めをしてた
ってか？」

「清廉さと引き換えにで村人が死んでもいいと思ってたのさ。もう
ろくしたんだ」

「兎に角、俺達は生きるために殺さなくちゃならねえんだ」

「大輔様は呼び戻しちゃんねえ。何も知らせちゃんねえ」

「警察に飛び込みかあねんからの」

「そりゃあ、自分の子が殺されるんやからの」

「けど、こいつは最後の犬だ。その後は」

「目の前に死期が迫ってるんだ。一年先のことなど知るか！」

人々は口々に意見を述べる。

大勢の声に、小勢の声は勢いを失くす。

私はおじいさんに守られていたことを知る。

彼らは既に抑えを失くしていることも知る。

それからしばらく後、白装束の男達に連れられて、私は屋敷の外へ出た。

朝早く、山には靄がかかっている。

屋敷の裏手にある山へと、男たちは登っていく。

私は四つんばいで、首に縄をかけられていた。

麻縄のささくれは首にささって痒みを覚える。

立ち上がるうとすると、押さえつけられる。

まるで犬のようだ。膝や掌は山肌に露出した砂利で擦り剥ける。

痛みを訴えると、口に丸めた布を捻じ込まれた。

犬は喋らない、と男は言う。

やがて目的がある場所にとどり着く。

山の中腹の辺りに、削り取られたような台地がある。

まるで棚田のような、水平を保った地面。

木々に囲まれたそこには、縄張りがしてある。

その中心に、深い穴がある。

私は穴に入るように指示される。

私は暴れて、なんとか逃げ出そうとするが、数人がかりで押さえつけられる。

穴は、私が背伸びをしてようやく頭一つ出るほどに深い。

男達は私の入った穴の中に土を入れる。

ただ黙々と、穴を埋める。私を埋める。

土の感触は冷やりとしていて、寒気を感じる。
すっかり埋まった私の周りの土を、男達が踏み固める。
私は首だけ穴から出した格好で、土の中に埋まる。
目の前には、お盆の上に載った食事がある。
なんのつもりだろうかと判らなくなる。
生き埋めにされるのかと考えたのだが、そんな様子は無い。
もちろん、目の前の食べ物を食べることも出来ない。
文字どおり、手も足も出ない。

三度目の食事で、私はようやく意図が読み取れた。
日に三度、きちんと食事は供えられる。
匂いもかけるほどの距離に置かれる。

けれど、私はそれを食べることはできない。
私はこのまま飢え死にすることになるのだ。
目の前には生への希望がある。

しかし、私はそれに届くことが無い。
絶対に掴めない生を確認し、自身の絶望の色が濃くなる。
生きるということを、これまで意識したことは無かった。
けれど、私と、私が掴むことのできない未来は、まるでコントラストのように、視覚に嗅覚に、その生を確認させる。目の前に迫った死を意識し続けることになる。私は初めて、死に対して恐怖を抱いた。

お父さんが、あの孤独な部屋の中で私に語りかけた希望を、私は得る事ができない。

誰もいない、人工の光が届かない。
山の中は風が木々を揺する音だけが響き渡る。
空を見上げると星がある。
空気は澄み切っていて、星の光はあまりに明るい。
狂いそうなほどの光の群れが視界を侵す。

瞳を閉じて、眩しさが残るようだった。

私はお父さんを想う、お母さんを想う。

ここで犬のように殺されることになる、私は一体何者だったのかを考える。

自己証明をする。お母さんは自らの答えを得たのだろうか。

お父さんに芽生えた自我は、果たして何者であったのか。

ふと、思い当たった。お父さんは、自己証明をしていない。

出来なかったが、出来るようになったはずなのに。

気づけば、必要が無かったのだ。

自分と言うものがそこに存在して、自分以外と分けることが出来て、自分が何者かであって、それを誰に対しても証明する必要が無かったのだ。人間というもののや、犬というものに、普遍的に存在する性質というものがあつたとして、自我というものに普遍性を求めることなど出来ないのではないか、そう気づいたのだ。

それが何者でもなかったお父さんの得たものだった。

そして私に与えられたものだった。

お母さんを経て、おじいさんを経て、私に至ったものだった。

水さえ与えられない穴の中で、私は渇きに苦しむ。

あまりの苦しみに、未だ生があることを後悔したほどだった。

口の中は渇ききって、唾液さえ出てこない。

顔がはれぼったい。唇も舌も腫れ上がっている。

きつと顔も同様に、膨れてしまっているだろう。

そんな私の前に、ペットボトルにたっぷりと入った水が置かれる。

目の前で、硝子のコップに、音をたてて注がれる。コップの中身が、欲しくて欲しくて、喉を鳴らそうと体が反応するが、唾液の無い喉は、生唾を飲み込むことさえ出来ずに、えずくばかりだった。

しかし、時間の経過と共に苦しみは過ぎ去る。

渇きにさえ体が慣れきってしまったのだ。

それに比例して、意識を保つことが難しくなる。

起きていても、朦朧としている。

それでも私は考える。何かを残そうとする。

私の得たもの、残せるもの。

生きた証。自我の残滓。

お父さんが、お母さんが、私に残したように、私も何かを残そうとする。

何度も何度も諦めそうになる。

お母さんも、お父さんも、残したかったから残したのだ。

お母さんは、お父さんへの想いを私に残した。

お父さんは、お母さんのくれた世界に感謝する気持ちを残した。

私には何も無い。犬のように飼いならされ、犬のように殺される私には。

お母さんを奪われ、おじいさんもいなくなって、お父さんにも会えない。

私は何かを得たのだろうか。

少しづつ失っていくだけの生涯ではなかったか。

それでも心を絞るようにして、何かを探す。

歌が聞こえる。

そこには喜びの感情がある。

暖かい何かがある。

私の中にあるのは悲しみだけではなかったんだ。

悲しみの反対側に、それを支えるように、喜びがある。

生への喜びがある。

存在できたことへの喜びがある。

歌をくれたのは、お父さんだった。お母さんだった。

伝えたい気持ちが、私にもある。

私は歌う。

渴いた喉は、掠れて音にならない。
それでも最後の力を振り絞る。

誰か、誰か、見てくれないか
誰か、誰か、聞いてくれないか
声が、音が、空に浮かんで
届け、届け、響け、そう、響け
山と海とを飛び越え、鳴らせ
彼方へ飛ばせ

届いてる？

犬の一族編2（後書き）

長くて途中で投げそうになりましたが、なんとか終わりました。
書いてる最中は嫌で嫌で仕方が無いんですが、終わると気持ち良い。
これだからやめられねえな。

「CUSTOM」は奥田民生の楽曲名です。
是非一度聴いてみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9248n/>

CUSTOM

2010年10月15日05時08分発行